

分野別教育評価自己評価書  
「人文学系」  
(平成14年度着手分)

岡山大学大学院文学研究科

平成15年7月

岡山大学



## 対象組織の現況及び特徴

### 1 現況

- (1) 機関名 岡山大学
- (2) 研究科名 文学研究科
- (3) 所在地 岡山県岡山市津島中三丁目1番1号

### (4) 専攻構成

#### 人間学専攻

哲学・倫理学

芸術学

比較文化学

#### 行動科学専攻

心理学

社会学・文化人類学

地理情報学

#### 歴史文化学専攻

歴史文化論

日本史学

考古学

#### 言語文化学専攻

言語学

日本言語文化論

アジア言語文化論

英語圏言語文化論

ヨーロッパ言語文化論

### (5) 学生数及び教員数

学生数 116 名

教員数 75 名

### 2 特徴

岡山大学大学院文学研究科（修士課程）は、昭和46年4月に哲学、心理学、国文学、英文学、独文学の5専攻をもって発足し、その後、仏文学と史学の2専攻が加わり、7専攻23講座となった。さらに、平成11年4月には、人間学、行動科学、歴史文化学、言語文化学の4専攻14講座に整備統合した。これは、平成7年に本研究科の基礎学部である文学部が4学科14大講座に改組されたことに呼応した措置であり、学部と修士課程を教育内容の点で対応させ、一貫性を持たせた結果であった。

本学文学部は、旧制第六高等学校以来の伝統を引き継ぎ、中国四国地方における人文学教育の枢要な地位にある。平成6年度の教養部廃止後は、旧教養部教員の定員29が移行し、人文学の専門教育とともに、全学の教養教育の重要な一翼を担っている。

平成5年4月には、文学部及び法学部、経済学部を基礎学部として、博士課程後期の独立大学院である文化科学研究科（2専攻4講座10教育分野）が設けられた。修士課程修了後に文化科学研究科に進む道が開かれ、留学生や社会人に学びやすい環境が整備された。

学生定員は発足当初26名であったが、昭和56年度からは42名になっている。平成11年度からは、学生募集を年2回実施している。これにともない、志願者・入学者ともに増加傾向にあり、平成14年度の場合、定員42名に対して、志願者79名、入学者49名である。

平成11年度からは社会人特別選抜を開始し、昼夜開講制を導入した。平成13年度には、他分野の卒業生や社会人を主に対象にした修士課程を3年以上在籍する長期在学コースを設けるなど、学習環境を整備した。

本研究科の授業は、基礎学部である文学部教員のほぼ全員で担当している。授業は、教員各自の研究分野を活かした専門性の高い内容で、徹底した少人数教育により、きめ細かな教育指導を特色としている。

## 教育目的及び目標

### 1 教育目的

本研究科は、人文学の各分野を網羅した修士課程として30年以上の実績を持ち、中国四国地方の要衝にあるという地理的要件から、本学はもとより中国四国地方や海外から多くの学生を受入れてきた。近年では、文化科学研究科（後期3年のみの博士課程）が設置されたことにより、高度な専門的職業人や研究者の養成にも有利な条件が広がっている。

大学院における人文学教育の課題は、「人間とは何か」という問いを学生自らが高度な専門性と総合性を身につける中で探求していくことである。豊富な人材を擁する本学文学部を基礎学部とする本研究科は、人文学のほぼ全分野にわたってそうした課題を追求しうる体制が備わっている。

こうした特徴を持つ本研究科の教育目的は、次のように定められる。

#### (1) 人材育成の基本方針

人間知に関わる専門性と総合性を兼ね備え、地域社会の各分野で活躍できる高度の専門的知識を持った職業人、研究者の育成を目指す。

#### (2) 学生受入の基本方針

人間・社会・文化についての広範な関心を持つとともに、専攻分野に関する専門知識を有し、柔軟かつ論理的な思考のできる者を幅広く受入れる。

#### (3) 提供する教育内容及び方法の基本的性格

多彩な教員により、人文学の各専攻分野に関する高度な専門的知識と研究方法等とともに、他分野についての専門知識も併せて提供することにより、総合的でバランスのとれた教育内容とする。

#### (4) 学習支援の基本方針

学生が、学習・研究計画を立てる上での適切な指導を行い、学生が教員へ相談し助言を受ける機会を保障するとともに、自主的学習環境を整備する。

### 2 教育目標

#### (1) 人材育成に関する目標

- (1) - 1 学部教育との整合を図り、その成果を踏まえて高度の専門性と総合性との調和ある教育を推進する。

- (1) - 2 多様な学問分野や人材育成に対応した組織を実現する。

- (1) - 3 専門的職業人や研究者を育成するために、実践的な専門能力を養成するとともに、文化科学研究科との連携を図る。

- (1) - 4 多様な方法により、本研究科の教育目的及び目標を学内外に周知する。 [目的(1)]

#### (2) 学生受入に関する目標

- (2) - 1 本研究科の教育目的に基づく学生受入方針を、様々な方法を工夫して学内外に周知する。

- (2) - 2 社会人や留学生、他大学や他分野の出身者など、多様な学生に対応した制度の整備を図る。

- (2) - 3 多様な学生の受入れを可能とする選抜方法を実施する。 [目的(2)]

#### (3) 提供する教育内容及び方法に関する目標

- (3) - 1 豊富な人材を活用し、多様な専門分野にわたるバランスの取れた教育課程を編成する。

- (3) - 2 少人数教育を徹底し、学生の能力・関心・進路などに対応したきめ細かな教育を実施する。

- (3) - 3 成績評価基準を設定し、それを学生に周知するとともに、適切な実施を図る。

- (3) - 4 学生の学習状況や修了後の進路状況などを適宜把握し、教育内容及び方法の改善を図る。

- (3) - 5 授業内容を有効に提供するための設備等を整備し、活用する。

- (3) - 6 教育活動について学内外から評価を行い、教育の質の向上と改善のために取り組む。 [目的(3)]

#### (4) 学習支援に関する目標

- (4) - 1 学生の授業履修計画にあたって、ガイダンス等の適切な実施と各講座での指導体制の確立を図る。

- (4) - 2 学生の学習活動に対する相談体制を整え、学生指導上での教員間の協力関係を強める。

- (4) - 3 学生が自主的に学習を進められるよう、施設や備品などを整備するとともに、利用促進を図る。 [目的(4)]

## 評価項目ごとの自己評価結果

### 1 教育の実施体制

#### (1) 要素ごとの評価

##### (要素1) 教育実施組織の整備に関する取組状況

###### 観点ごとの評価結果

観点A：学科・専攻の構成

###### (取組状況)

平成11年度に、従来の7専攻を4専攻に整備・統合した。これは、平成7年度に文学部が3学科27講座から4学科14大講座に改組されたことに伴うものである。この結果、学部の4学科に対応する形で4専攻が設けられることになり、修士課程の14講座は学部の15の履修コースとほぼ対応する形になった(資料1-1)。

学生定員は1学年42名で、内訳は人間学専攻8名、行動科学専攻5名、歴史文化学専攻10名、言語文化学専攻18名、行動科学専攻長期在学コース(標準修業年限3年)1名である。平成15年5月1日現在の現員は116名で、収容定員85名に対して1.36倍にあたり、ほぼ妥当な水準である(資料1-2)。

文学部及び法学部・経済学部を基礎学部として、博士課程後期の独立研究科である文化科学研究科(2専攻・4講座・10教育分野)が設けられており、本研究科修了後の進路の一つとなっている。

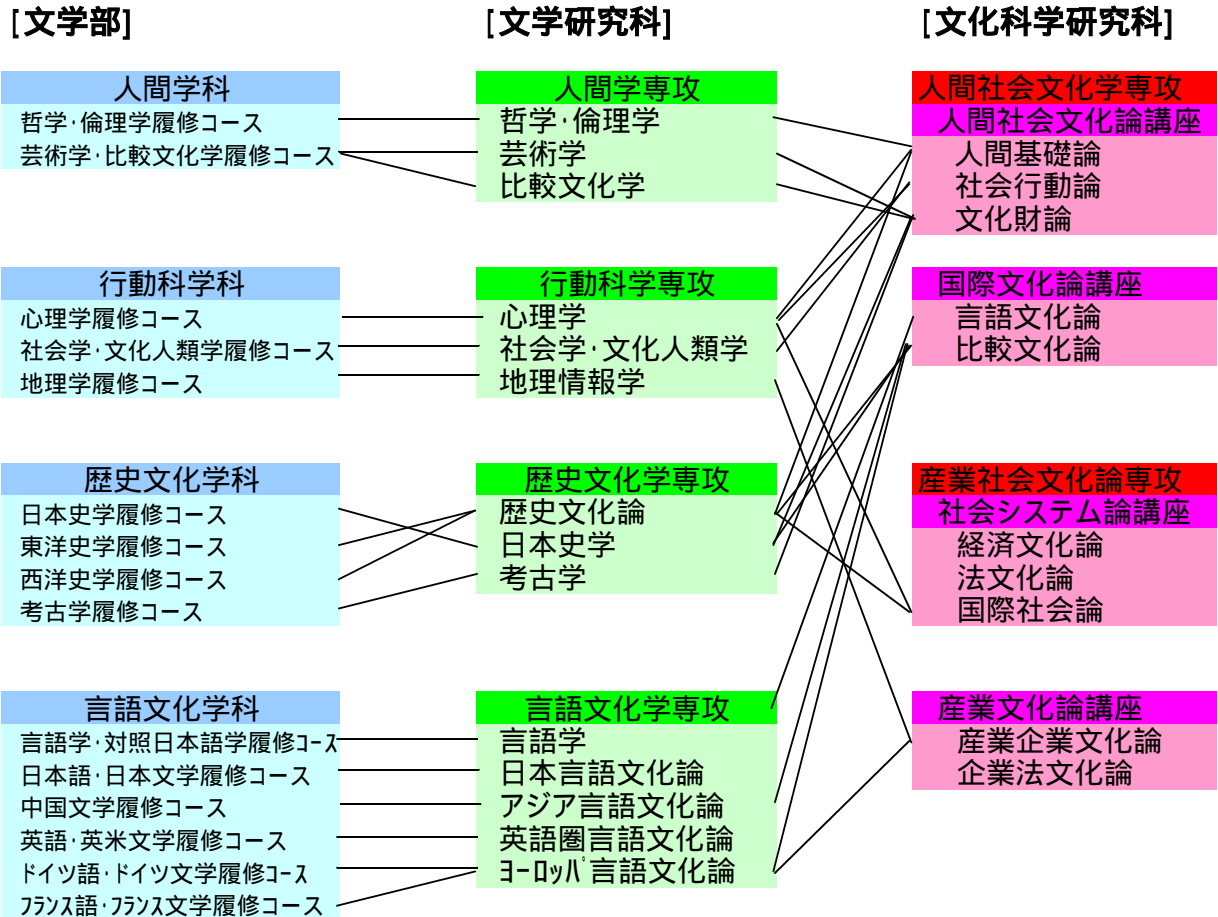
###### (分析結果)

教育目標(1)-1, (1)-2及び(1)-3に対応するこれらの取組は相応である。

###### (根拠理由)

専攻・講座の内容は、人文学の基礎分野をほぼ網羅しており、人間知に関わる専門性と総合性を兼ね備えた人材を育てるのにふさわしい。専攻・講座の整備・統合により、集中性と機動性を兼ね備えた柔軟な組織となった。学部組織との整合性を図ったことにより、学部教育の成果を踏まえて、高度の専門的知識を持った職業人・研究者を養成するという目的に合致した組織となっている(資料1-1)。

資料1-1 学部と大学院の関係



出典：文学部，文学研究科，文化科学研究科各規程を基に作成

資料1-2 文学研究科在籍人員一覧表（入学年度別）

平成 15年 5月 1日現在

専攻等	入 学 年 度				合 計	休 学
	15	14	13	12		
人間学専攻	8( 6)	7( 2)	3( 3)		18( 11)	3( 2)
行動科学専攻	5( 3)	13( 8)	5( 2)		23( 13)	3( 2)
行動科学専攻 (長期履修コース)	1( 1)	1( 0)	2( 1)		4( 2)	1( 1)
歴史文化学専攻	13( 4)	11( 5)	8( 3)	1( 1)	33( 13)	5( 2)
言語文化学専攻	15( 8)	16( 11)	4( 2)	3( 2)	38( 23)	3( 2)
計	42( 22)	48( 26)	22( 11)	4( 3)	116( 62)	15( 9)

出典：学務関係資料より

注：( )は女子で内数

## 観点B：教員組織の構成

## (取組状況)

文学部の改組に伴い、文学研究科の担当教員数が大幅に増加し、担当できる教育・研究分野が拡大した。各専攻・講座へは、基本的に分野ごとの教育に対応した教員が配置できており、教員はほぼ全員が学部・教養教育を兼担している。教員1人当たりの学生定員は、平均0.56人である。また、教員のうち45人が文化科学研究科の教育を兼担している。

## (分析結果)

教育目標の(1)-2, (3)-1及び(3)-2に対応するこれらの取組は優れている。

## (根拠理由)

教員は分野ごとに充分配置されており、多様な人材育成に対応した組織となっている(資料1-3)。担当教員の専門分野も多彩で、それぞれの専攻の多様な教育課程に十分対応している(資料1-4)。教員数と学生定員との比率は、専攻によって多少異なるが、全体として少人数教育を徹底するという目標に合致したものとなっている(資料1-5)。

資料1-3 専攻・講座別の教員配置

(平成15年5月1日現在)

専攻	講座	教員
人間学専攻(14)	哲学・倫理学講座	7
	芸術学講座	4
	比較文化学講座	3
行動科学専攻(13)	心理学講座	4
	社会学・文化人類学講座	5
	地理情報学講座	4
歴史文化学専攻(15)	歴史文化論講座	7
	日本史学講座	4
	考古学講座	4
言語文化学専攻(33)	言語学講座	6
	日本言語文化論講座	5
	アジア言語文化論講座	4
	英語圏言語文化論講座	7
	ヨーロッパ言語文化論講座	11
計		75

出典：文学研究科教員・現員表より

## 資料1 4 教員構成及びその専門研究分野

(平成15年5月1日現在)

	講座	職名	教員名	専門分野
人間学	哲学・倫理学	教授	稲村秀一	哲学的人間学
		教授	高橋文博	日本近世近代の倫理思想
		教授	北岡武司	カント哲学を中心とする西洋近世哲学
		助教授	山口信夫	フランス思想史
		助教授	出村和彦	古代ギリシア哲学とキリスト教の倫理思想
		助教授	吉谷啓次	現代思想・生命倫理
		助教授	竹島あゆみ	ヘーゲル哲学を中心とする西洋近世哲学
専攻	芸術学	教授	山口和子	ドイツ・ロマン主義美学
		助教授	三宅新三	ドイツ・オペラ史, オペラ表象論
		助教授	龍野有子	西欧近代美術史
		助教授	伊藤大輔	中世日本絵画史
専攻	比較文学	教授	金関猛	精神分析, 演劇論
		助教授	宇田川重	シェークスピアを中心とするエリザベス朝演劇研究
		助教授	鐸木道剛	イコン(聖像)とビザンティン美術史, 東欧・日本近代美術
行動科学	心理学	教授	多屋頼典	実験心理学
		教授	長谷川芳典	行動分析学
		教授	田中共子	社会心理学
		助教授	村本由紀子	社会心理学
専攻	社会学・文化人類学	教授	小林孝行	コリア社会の近代化, 比較社会論
		教授	北村光二	コミュニケーション論, 牧畜民の人類学
		助教授	大杉洋	ゲーテと自然科学
		助教授	中谷文美	ジェンダーの文化人類学, 労働論, 東南アジアの社会変容
		助教授	藤井和佐	農・漁村に関する地域社会学的研究
専攻	地理情報学	教授	中藤康俊	地理学概論, 人文地理学
		教授	内田和子	地理情報学, 自然地理学
		助教授	中尾知代	メディア表象文化論
		助教授	北川博史	地理情報学, 社会経済地理学
歴史文化	歴史文化論	教授	新村容子	中国近代史
		教授	永田諒一	宗教改革と信仰告白対立, 民衆文化と宗教
		助教授	田熊文雄	ドイツ三月前期の社会運動, 1848年革命
		助教授	加治敏之	中国近世思想史
		助教授	渡邊佳成	東南アジア史
		助教授	吉田浩	近代ロシア農民社会史, 農民慣習法研究
専攻	日本史学	教授	倉地克直	日本近世史
		教授	久野修儀	日本中世史
		助教授	姜克実	日本近代史
		助教授	今津勝紀	日本古代史
専攻	考古学	教授	稲田孝司	旧石器時代・縄文時代・動物化石の産状・文化財問題
		教授	新納泉	古墳時代, プリテンの鉄器時代, コンピュータ考古学
		助教授	松木武彦	政治権力の形成過程, 原始・古代の戦争と軍事組織
		助教授	松本直子	縄文から弥生への社会・文化変化, 認知考古学

	講座	職名	教員名	専門分野
言 語	言語学	教授	尾川浩	ドイツ語圏文学の物語分析, テクスト言語学
		教授	辻星児	東アジアの諸言語の研究
		助教授	宮崎和人	日本語学・日本語文法論
		助教授	栗林裕	チュルク諸語及び日本語の語形成論, 統語論
		助教授	片桐真澄	フィリピン諸語等オーストロネシア諸語, 類型論
文	日本語文化論	講師	中東靖恵	社会言語学・日本語音声学
		教授	渡邊護	上代文学
		教授	江口泰生	日本語学(古代)
		助教授	田仲洋己	中古・中世文学
		助教授	片山倫太郎	近・現代文学
学 攻	アジア言語文化論	助教授	山本秀樹	近世文学
		教授	岡本不二明	宋代文学・文言小説史
		教授	木下鉄矢	朱子学・清代考証学
		助教授	橘英範	文選・唐詩
		助教授	遊佐徹	明清小説・近代思想・現代文学
専 攻	英語圏文化論	教授	西前孝	アメリカの文学と映画
		教授	和田道夫	生成文法統語論
		教授	吉岡文夫	シェークスピア研究
		教授	中谷ひとみ	現代アメリカ文学(小説)研究
		教授	松本明子	英語学・英語史
		助教授	水野佳三	語彙意味論, 機能的構文論
		助教授	劔持淑	現代イギリス小説研究
攻	ヨーロッパ言語文化論	教授	高橋輝和	中世ドイツ文学・ドイツ語史
		教授	木之下忠敬	19世紀フランス文学
		教授	寺岡孝憲	19世紀ドイツ文学史
		教授	永瀬春男	17世紀フランスの思想と文学
		助教授	江代修	文芸社会学
		助教授	上田和弘	19世紀フランス詩
		助教授	久保田聡	ドイツ・リアリズム文学
		助教授	延味能都	16世紀ルネサンス文学
		助教授	萩原直幸	フランスロマン主義文学
		助教授	宮川栄司	ドイツ文学解釈論・ロマン派研究
		助教授	金子真	フランス語学

出典：『平成15年度文学部・文学研究科案内』等より

資料1-5 専攻別の学生定員・教員数

専攻	学生定員	教員数	教員1人当たりの学生定員
人間学専攻	8	14	0.57
行動科学専攻	6	13	0.46
歴史文化学専攻	10	15	0.67
言語文化学専攻	18	33	0.55
計	42	75	0.56

出典：学務関係資料より

**要素1の貢献の程度**

以上の観点ごとの自己評価結果から、教育実施組織の整備に関する取組状況は、教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。

**(要素2) 教育目的及び目標の趣旨の周知及び公表に関する取組状況****観点ごとの評価結果****観点A：学生、教職員に対する周知の方法とそれらの効果**

(取組状況)

教員へは定期的開催される研究科委員会、学生に対しては入学時のガイダンスや『学生便覧』を通じて周知している(ガイダンスについては 頁 46参照)。日常的な周知は、専攻・講座・指導教員が行っている。

(分析結果)

教育目標(1)-4に対応するこれらの取組は相応である。

(根拠理由)

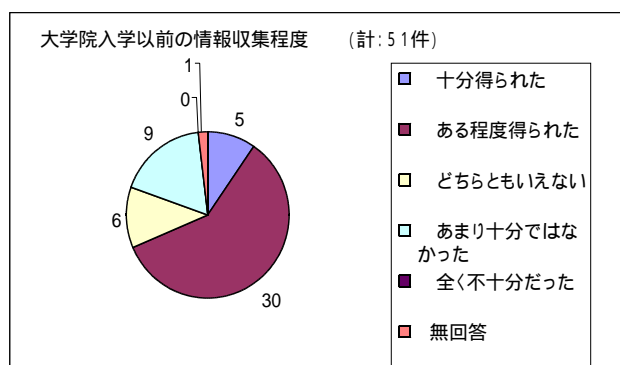
『学生便覧』・ガイダンス資料は整備されている。大学院生アンケート(平成15年2月実施、回収数51、回収率42.9%)(以下、「アンケート 1」という)によれば、約70%の学生が入学以前の情報収集程度は「十分得られた」「ある程度得られた」と答えている(資料1-6)。ただし、学生への日常的な周知は、多くは講座もしくは指導教員に任されており、その状況を全体として把握・点検する体制は特にない。

資料1-6 入学以前の情報収集程度

十分得られた	5(9.8)
ある程度得られた	30(58.8)
どちらともいえない	6(11.8)
あまり十分ではなかった	9(17.6)
全く不十分だった	0
無回答	1(2.0)
計	51

出典：アンケート 1

注：( )内は割合(%)



**観点B：学外者に対する公表の方法とそれらの効果**

(取組状況)

『岡山大学文学部・文学研究科案内』(以下、「研究科案内」という)及びホームページにおいて公表している。

講座によっては、ホームページにおいて詳しく知らせているものもあり、そうしたホームページへのアクセスはかなりの数にのぼる。

(分析結果)

教育目標の(1)-4に対応するこれらの取組は相応である。

(根拠理由)

『研究科案内』は、平成14年度から専攻ごとの頁を設けるなど充実を図った。アンケート 1によれば、49%が入学に当たって『研究科案内』を参考にしており、そのうち76%が役に立ったと答えている(資料1-7)。講座のホームページへのアクセス数も多いが(資料1-8)、開設していない講座もある。アンケート 1によれば、45%が入学前にホームページを参考にしており、そのうち74%が役に立ったと答えている(資料1-9)。

## 資料1-7 『研究科案内』の利用状況

参考にした	25(49.0)
参考にしなかった	24(47.1)
無回答	2( 3.9)
計	51

役に立った	19(76.0)
役に立たなかった	1( 4.0)
無回答	5(20.0)
計	25

出典：アンケート 1

注：( )内は割合(%)

## 資料1-8 ホームページの利用状況(歴史文化学科日本史学講座の例)

2003/04/15(Tue) 15:56

閲覧項目	件数	学内	学外
研究室案内	138	10	128
大学院案内	54	3	51
シラバス	50	3	47
教員一覧	193	32	161
アルバム	246	40	206

Summary Period:2003 Mar16 to 2003 Apr15

Requests Received: 13616

Requests From Inside of OUNet: 3624

Requests From Outside of OUNet: 9992

出典：歴史文化学科日本史学講座ホームページの利用状況集計結果より

## 資料1-9 ホームページの利用状況

参考にした	23(45.1)
参考にしなかった	26(51.0)
無回答	2( 3.9)
計	51

役に立った	17(73.9)
役に立たなかった	2( 8.7)
無回答	4(17.4)
計	23

出典：アンケート 1

注：( )内は割合(%)

#### 要素2の貢献の程度

以上の観点ごとの自己評価結果から、教育目的及び目標の趣旨の周知及び公表に関する取組状況は、教育目的及び目標の達成に相応に貢献している。

### **(要素3) 学生受入方針(アドミッション・ポリシー)に関する取組状況**

#### **観点ごとの評価結果**

##### **観点A：学生受入方針の明確な策定**

(取組状況)

学生受入方針の策定は、大学院専門委員会を中心に検討し、研究科委員会で適宜議論している。平成11年に4専攻へ改組を行い、その後も、社会人の再教育や他の学問分野を専攻した学生を受入れるために、昼夜開講制や長期在学コースなどを設置した。

(分析結果)

教育目標(2)-1及び(2)-2に対応するこれらの取組は相応である。

(根拠理由)

研究科委員会において継続的に議論し、方針の明確化・豊富化に努めている。ただし、全体として学生受入方針を整理し、明示する点では改善の余地がある。

##### **観点B：学生受入方針の学内外への周知・公表**

(取組状況)

研究科及び専攻が求める学生像などについては『研究科案内』に、社会人特別選抜・長期在学コースについては『学生募集要項』に記している。学生募集の方法及び入試のあり方などについては、『学生募集要項』やホームページにおいて公表している。

(分析結果)

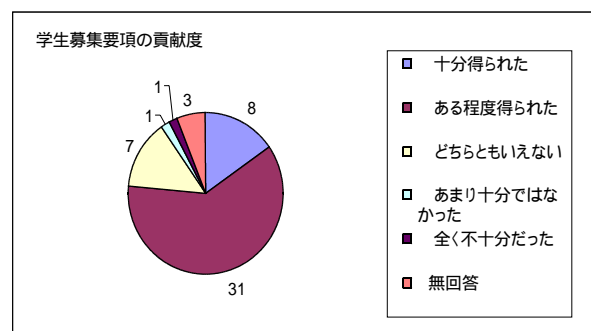
教育目標(2)-1に対応するこれらの取組は優れている。

(根拠理由)

本研究科では、『研究科案内』、『学生募集要項』、ホームページなどの改善を行った。アンケート1によれば、76%の学生が『学生募集要項』から必要な情報が「十分得られた」、「ある程度得られた」と答えている(資料1-10)。また、先にも触れたように、約70%の学生が入学前に必要な情報が「十分得られた」、「ある程度得られた」と答えている(資料1-6)。この結果、学外からの受験者数、入学者数ともに増加した(資料1-11, B欄)。

資料1-10 『学生募集要項』の貢献度

十分得られた	8 (15.7)
ある程度得られた	31 (60.8)
どちらともいえない	7 (13.7)
あまり十分ではなかった	1 (2.0)
全く不十分だった	1 (2.0)
無回答	3 (5.8)
計	51



出典：アンケート 1

注：( )内は割合(%)

資料1-11 志願者数・受験者数・合格者数・入学者数の推移

年 度	志 願 者 数			受 験 者 数			合 格 者 数			入 学 者 数		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
平成10年度	45	24	-	41	23	-	33	17	-	26	13	-
平成11年度	55	28	5	52	25	5	44	17	3	39	16	3
平成12年度	75	48	17	68	44	17	55	32	12	50	29	11
平成13年度	87	66	16	81	62	14	58	40	11	52	35	9
平成14年度	79	49	10	69	41	10	52	25	8	49	23	8

出典：学務関係資料より

備考：A：全体，B：学外からの状況，C：社会人特別選抜の状況

### 観点C：学生受入方針（アドミッション・ポリシー）に従った学生受入方針

（取組状況）

学内外から広く学生を受入れるために、平成11年度より学生募集を前期と後期の2回行うこととした。社会人特別選抜・長期在学コースのための選抜では、筆記試験から外国語科目を除くなど、受入方針に従った幅広い学生を受入れを図った。言語文化学専攻ヨーロッパ言語文化論講座では、口述試験を卒業論文を中心としたものから「研究計画調査票」等を中心としたものに改めた。本研究科では外国人特別選抜を実施していないが、毎年一定数の留学生の入学者がある（資料1-12）。これらの者は学部特別聴講生や研究生の制度を利用し、半年から1年間の準備期間を経て入学する場合が多い。

（分析結果）

教育目標(2)-2及び(2)-3に対応したこれらの取組は優れている。

（根拠理由）

学生の状況及び受入方針に従って、多様な学生に対応する制度の整備や選抜方法など、系統的な改善を実施している。その結果、この間に受験者数、入学者数ともに増加した（資料1-11，A欄）。特に社会人特別選抜制度は、一般に周知されるようになった平成12年度以降一定の受験者、入学者が確保されており、定着してきている（資料1-11，C欄）。

資料1-12 外国人留学生受入数の推移

年 度	学 部 学 生	学 部 研 究 生	学部特別 聴講学生	学 部 日 研 生	修 士 学 生	修 士 研 究 生	国 名
平成13年度	6	5	2	3	7	7	中国, ｲﾝﾃﾞｰｼﾞｱ, ﾕｰｺﾞ, ﾐﾔﾝﾏｰ, ﾎﾟｰﾗﾝﾄﾞ, ﾌｲﾝﾗﾝﾄﾞ
平成14年度	3	0	3	3	7	1	中国, 台湾, 韓国, ｲﾝﾃﾞｰｼﾞｱ, ﾐﾔﾝﾏｰ, ﾎﾟｰﾗﾝﾄﾞ, ﾌｲﾝﾗﾝﾄﾞ
平成15年度	3	0	2	3	4	4	中国, 韓国, ｲﾝﾃﾞｰｼﾞｱ, ﾎﾟｰﾗﾝﾄﾞ, ﾄﾙｺ, ﾏﾒﾘｶ, ﾐﾝﾄﾞﾈｼﾞｱ, ﾚｰﾏﾆｱ

出典：教務学生係集計結果より

### 要素3の貢献の程度

以上の観点ごとの自己評価結果から、学生受入方針（アドミッション・ポリシー）に関する取組状況は、教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。

#### (2) 評価項目の水準

以上の自己評価結果を総合的に判断して、教育の実施体制は、教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。

#### (3) 特に優れた点及び改善点等

人文学の幅広い基礎分野にわたって専攻・講座を整備し、少人数教育を実施できる十分な教員を配置している点は、優れている。また、学生募集の年2回実施、社会人特別選抜、昼夜開講制、長期在学コースの設置など、制度上の継続的な改善を行い、受験者数・入学者数の増加を実現した点でも優れている。学生受入方針を整理し、アドミッション・ポリシーとして明示することなどは改善が必要である。

## 2 教育内容面での取組

### (1) 要素ごとの評価

#### (要素1) 教育課程の編成に関する取組状況

##### 観点ごとの評価結果

##### 観点A：教育課程の体系的な編成

###### (取組状況)

平成11年度に4専攻14講座へ整備統合したことにより、小講座単位の指導から大講座の複数教員による指導へと編成替えされ、多分野の教育がスムーズに行えるようになった。4専攻は学部の4学科と対応しているので、そこでの大講座の集団的な教育指導体制は、ほぼ学部の履修コースの指導体制と一致するものとなっている。これによって、専門教育分野のバランスに則りつつ、専攻を同じくする教員相互の連絡がとりやすい体制とした。

従来の修業年限2年の修士課程は、昼夜開講制となっているのに加えて、標準修業年限を3年とする長期在学コース(定員1名)を行動科学専攻に設置して、平成13年度から学生を受入れている。

###### 1) 修士課程における講義・演習の構成と配置

講義と演習は、それぞれ8単位ずつを必修としており、いずれかに片寄らないようにしている。各専攻は教員それぞれの専門性を生かして、専攻の領域をバランスよくカバーするような授業を開講している。さらに、各講座では毎年2単位分の講義で非常勤講師を招き、専門を広くカバーするように努めている。夜間に開講する科目の充実に努め(資料3-6(頁26))、社会人等も無理なく履修できるように講義・演習を配置している。

###### 2) 研究テーマに直接関連する領域と近接する領域の講義・演習のバランス

学生が所属する専攻の必修科目16単位に対して、選択科目を14単位設定しており、多方面の関連科目が履修できるようにしている。専攻を越えた履修も妨げていない。

###### 3) 修士課程における学部教育との連携

教員組織は学部と基本的に同じなので、両者の教育の連携はスムーズである。

本研究科の専攻・講座は、学部の学科・履修コースに対応しており、学部教育の発展として大学院での教育課程を編成している。

他分野・他大学から進学した学生や留学生には、学部の授業の聴講をすすめている。

###### (分析結果)

教育目標(1)-1, (1)-2, (3)-1及び(3)-2に対応するこれらの取組は優れている。

###### (根拠理由)

講義・演習は多分野にわたって系統的に準備されている(資料2-1)。社会人・留学生に対する配慮も、各専攻・講座で工夫されている。各講座向けアンケート(平成15年2月実施)(以下、「アンケート」No.2という)によれば、夜間開講で単位を充足できるようにし(哲学・倫理学)、曜日についても配慮している(芸術学・比較文化学)。その際、入学前に出席可能な曜日を確認して可能な限り授業の開講日を調整したり(社会学・文化人類学)、学生の都合に合わせて夜間や土曜日に開講したりしている(地理情報学)。



専攻	講座	授業科目	必修科目単位	選択科目単位
歴史文化学専攻	歴史文化論	アジア社会文化史特講 比較宗教史特講 国際関係史特講 移民社会史特講 文化交流史特講 多民族社会文化論特講 ヨーロッパ社会文化史特講 アメリカ社会文化史特講 史学史特講	8	
		アジア社会文化史演習 比較宗教史演習 国際関係史演習 移民社会史演習 文化交流史演習 多民族社会文化論演習 ヨーロッパ社会文化史演習 アメリカ社会文化史演習 史学史演習	8	
	日本史学	日本史研究法論特講 日本古代史特講 日本中世史特講 日本近世史特講 日本近現代史特講 日本史研究法論演習 日本古代史演習 日本中世史演習 日本近世史演習 日本近現代史演習	8 8	
考古学	考古学	先史文化論特講 原始社会比較論特講 弥生時代社会論特講 考古学方法論特講 歴史考古学特講 先史文化論演習 原始社会比較論演習 弥生時代社会論演習 考古学方法論演習 歴史考古学演習	8 8	
		言語文化論	近現代日本語論特講 古代日本語論特講 古代文学論特講 中世文学論特講 近世文学論特講 近現代文学論特講 近現代日本語論演習 古代日本語論演習 古代文学論演習 中世文学論演習 近世文学論演習 近現代文学論演習	8 8
言語文化学専攻	言語文化論	近現代日本語論特講 古代日本語論特講 古代文学論特講 中世文学論特講 近世文学論特講 近現代文学論特講 近現代日本語論演習 古代日本語論演習 古代文学論演習 中世文学論演習 近世文学論演習 近現代文学論演習	8 8	

専攻	講座	授業科目	必修科目単位	選択科目単位
言語文化学専攻	言語学	言語通時論特講 個別言語学特講 社会言語学特講 現代日本語論特講 言語類型論特講 テクスト言語論特講 言語通時論演習 個別言語学演習 社会言語学演習 現代日本語論演習 テクスト言語論演習	<div style="border: 1px solid black; width: 50px; height: 20px; margin-bottom: 5px;"></div> 8	
	アジア論 言語文化論	中国古典文化論特講 中国詩歌論特講 中国近世戯曲小説論特講 近現代中国文学論特講 中国古典文化論演習 中国詩歌論演習 中国近世戯曲小説論演習 近現代中国文学論演習	<div style="border: 1px solid black; width: 50px; height: 20px; margin-bottom: 5px;"></div> 8	<div style="border: 1px solid black; width: 50px; height: 20px; margin-bottom: 5px;"></div> 8
	英語圏論 言語文化論	アメリカ文芸論特講 現代アメリカ文学論特講 アメリカ文学特講 現代英米詩論特講 イギリス文芸論特講 ルネッサンス文芸論特講 生成文法統語論特講 英語統語論特講 英語学特講 アメリカ文芸論演習 現代アメリカ文学論演習 アメリカ文学演習 現代英米詩論演習 イギリス文芸論演習 ルネッサンス文芸論演習 生成文法統語論演習 英語統語論演習 英語学演習	<div style="border: 1px solid black; width: 50px; height: 20px; margin-bottom: 5px;"></div> 8	<div style="border: 1px solid black; width: 50px; height: 20px; margin-bottom: 5px;"></div> 8
	ヨーロッパ論 言語文化論	現代ドイツ言語文化論特講 中世ドイツ言語文化論特講 ドイツ文化論特講 ドイツ文芸理論特講 近現代ドイツ小説論特講 近代ドイツ文学論特講 現代ドイツ文学論特講 現代ドイツ言語文化論演習 中世ドイツ言語文化論演習 ドイツ文化論演習 ドイツ文芸理論演習 近現代ドイツ小説論演習 近代ドイツ文学論演習 現代ドイツ文学論演習	<div style="border: 1px solid black; width: 50px; height: 20px; margin-bottom: 5px;"></div> 8	<div style="border: 1px solid black; width: 50px; height: 20px; margin-bottom: 5px;"></div> 8

専攻	講座	授業科目	必修科目単位	選択科目単位
言語文化学専攻	ヨーロッパ言語文化論	ルネッサンス言語文化論特講 近世フランス文学論特講 ロマン派文学論特講 テクスト分析論特講 近現代小説論特講 近現代フランス詩論特講 現代フランス文学論特講 現代文学理論特講 フランス言語学特講	8	
		ルネッサンス言語文化論演習 近世フランス文学論演習 ロマン派文学論演習 テクスト分析論演習 近現代小説論演習 近現代フランス詩論演習 現代フランス文学論演習 現代文学理論演習 フランス言語学演習	8	

(注) 授業科目は、講義題目ごとに4単位又は2単位の授業科目として開講する。

## 観点B：教育課程の編成上の配慮

(取組状況)

### 1) 研究者養成のための配慮

本研究科の各専攻からは、博士課程に進学できる能力を備えた学生が多く出ている。(資料4-6(頁43))これに向けた教育は、専門教育分野のまとまりを持った講座の協力の下に編成されている。そのため、学生は専門に近い教員の学問研究と教育との両方に打ち込む様子を身近に見ることができるようになっている。学生は当該講座が中心となって運営する学会に積極的に関わっている(資料3-14(頁29)、資料3-15(頁30)、資料5-4(頁50))。学会や研究会での口頭発表、機関誌への投稿の門が開かれており、修士論文の要旨が掲載されることもあって、学生への刺激となっている。

### 2) 高度職業人養成のための配慮

アンケート 2によれば、学生の希望に応じて、資格取得を支援するための特別の取り組みをする(心理学、日本語文化論)、専門とするテーマと関連させて官庁や企業を訪問させる(地理情報学)、実地訓練や作業などの課外活動と通常の授業とを組み合わせる実践的な専門能力を養成する(日本史学、考古学、日本語文化論)、などの具体的な努力が行われている。

(分析結果)

教育目標(1)-3、(3)-1及び(3)-2に対応するこれらの取組は相応である。

(根拠理由)

各専門分野ごとに本学内に事務局などを置く学会(資料3-13(頁29))があり、学生の多くがその活動に参加している(資料3-14(頁29)、資料3-15(頁30))。実践的な専門能力の養成のために講座ごとに努力している。

## 要素1の貢献の程度

以上の観点ごとの自己評価結果から、教育課程の編成に関する取組状況は、教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。

## (要素2) 授業(研究指導を含む)の内容に関する取組状況

### 観点ごとの評価結果

#### 観点A：教育課程の編成の趣旨にあった授業内容とするための取組

(取組状況)

### 1) 授業内容改善のための学生による授業評価の実施

学部では全授業について学生による授業評価アンケートが実施されているが、大学院は少人数授業が中心のため、固有の授業評価は導入していない。それにかえて学生との話し合いの中で改善の努力を行っている。

### 2) 学生の意欲を高めるような配慮

本研究科のシラバス(講義要覧)は、従来は各人各様の簡略なものであったが、平成13年度から研究科で統一された詳しい書式に変更した。特に、発展科目の記入欄を設けることによって、学生がさらに関連してどのような科目をとることが望ましいかを伝えることができるようになった。コメント欄にはオフィスアワーやE-mail連絡先が記され、授業内容に関する応答ができるようになっている(資料2-2)。各教員の授業計画は、シラバス提出に先立って、講座会議を開いて、バランスがとれるよう

に相互に調整したうえで、講座幹事のもとにとりまとめられている。

3) 他分野から新たに修士課程に入学してきた学生に対する教育上の配慮

行動科学専攻では、長期在学コースを導入して他の分野からの入学の垣根を低くする試みを進めている。このコースはもとより、他コースでも、他大学や他分野からの入学者に対して、学部授業の聴講を奨励して、専攻する分野についての基礎知識を身につけ研究状況を把握するように配慮している。

(分析結果)

教育目標(2)-2及び(3)-2に対応するこれらの取組は相応である。

(根拠理由)

少人数教育を徹底する中で、授業改善を図っている。長期在学コースをはじめ、各専攻・各講座で多様な学生のニーズに対応した工夫をしており、シラバスの改善も行われている(資料2-2)。

資料2-2 その1 大学院授業シラバスの例(平成10年度)

古代中世西洋倫理思想史特講( H10年度以前入学生 倫理学特講) <b>アウグスティヌスの倫理思想</b> Special Topics in Western Ethics		4単位 通年 重複履修可  金曜 4限
助教授 出村 和彦		
【授業の概要】 西洋倫理思想に重大な影響を持っているアウグスティヌスに見られる特徴的な思考を様々な角度から検討すること。		
【授業の概要】 序 本論の構想と構成 第一章 第一節 『告白録』における良知・良心( conscientia ) 第二節 良知・良心の比較思想的考察 1 ギリシア哲学と教父たち 第三節 2 中世哲学と近現代哲学 第四節 3 孟子・朱子学・陽明学 第五節 4 日本における展開 第六節 アウグスティヌスの『説教』における良知・良心 まとめ 第二章 第一節 『告白録』における心( cor )の概念 第二節 私の心と私たちの心 第三節 心・精神・魂・身体 第四節 アウグスティヌスの人間論 第三章 キヴィタス( civitas )の概念 第四章 アウグスティヌスにおける創造と歴史 まとめ		
【テキスト・参考文献・資料等】 金子晴勇編 『アウグスティヌスを学ぶ人のために』(世界思想社)		
【成績評価の方法】 期末レポート。		

出典：『平成10年度学生便覧』より

## 資料2-2 その2 大学院授業シラバスの例（平成14年度）

**【授業科目の区分】**文学研究科科目**【講義番号】**211117**【授業科目】**古代中世西洋倫理思想史特講 Special Topics in Ancient and Medieval Thought**【講義題目】**心の人間学の諸問題研究 I**【学期】**前期**【単位】**2単位**【曜日・時限】**火曜4限**【重複履修の可否】**可**【担当教員】**出村和彦**【授業の概要】**

心臓によって、人間の全体、心を象徴することの西洋精神史の諸相を考察する講義と、これを踏まえて院生がどのように学問的に応答できるかを吟味するチュートリアルを行う。

**【到達目標】**

アウグスティヌスの心理解の最新研究を理解し、評価できるようになる。そのために、大学院生として必要な研究法を身につける。

**【授業計画】**

第1回；授業の進め方の説明，序論，チュートリアルについての打ち合わせ

第2回；図像に見る西欧近代の「心臓(heart)」中心主義

第3回；アウグスティヌスの原像，読者，著者，説教者，論争者

第4回；三九七年の説教と『告白』

第5回；同上

第6回；『マニ教徒ファウストス論駁』と『告白』

第7回；同上

第8回；以上のまとめ この頃，第1回チュートリアル

第9回；近代の聖心(The Sacred Heart)信心の広がり パスカル前後

第10回；同上

第11回；アウグスティヌスと「心の清さ(The Purity of Heart)」

第12回；同上

第13回；「心を上げよ sursum cor」の問題

第14回；同上

第15回；まとめ この頃，第2回チュートリアル

**【受講要件】**

特にない。

**【発展科目】**

木曜2限の大学院演習『ヒッポのアウグスティヌス伝記研究』は関連発展研究である。

**【テキスト等】**

必要な資料は講義で配布する。

**【成績評価】**

授業で考察した各トピックについての小レポート 40

特別口頭発表と面接（チュートリアル）2回 30

期末レポート 30

**【コメント】**

諸君自身の研究領域について，研究方法について自覚的になってもらいたい。

質問は，E-mail: [demura@cc.okayama-u.ac.jp](mailto:demura@cc.okayama-u.ac.jp) をお願いします。

出典：『平成14年度シラバス』より

## 観点B：教育課程の編成の趣旨に沿った研究指導とするための取組

(取組状況)

### 1) 指導教員の選定や研究課題の設定の際の指導

各講座では学年の始めにオリエンテーションを行い、学生との話し合いを通して指導教員を決めている(資料3-10(頁28))。また、アンケート 2によれば、研究課題の設定に関しては、一人の教員だけでなく他の教員にも相談することを奨励したり、合同発表会などを通して複数の教員の指導を受けられるように配慮しているところもある(資料3-11(頁28), 資料3-12(頁28))。

### 2) 論文作成に至るまでの配慮(たとえば、中間発表など)

すべての講座が、授業の中で適宜発表させるだけでなく、中間発表会や合同演習の形で修士論文作成過程で発表できる機会を設定している。また、学会や研究会での発表を奨励し、講座によっては学会発表を義務づけているところもある(資料2-3)。これらは学生にとって大きな刺激となっており、それに向けて指導教員のみならず複数の教員が支援している。

### 3) 他分野から新たに修士課程に入学してきた学生に対する教育上の配慮

学部の演習への参加により研究方法論の基礎を身につけさせるとともに、個別の研究指導を強化している。

(分析結果)

教育目標(2)-2, (3)-2, (4)-1及び(4)-2に対応するこれらの取組は優れている。

(根拠理由)

少人数教育の利点を生かしたきめ細かな研究指導が行われており、他分野から進学した学生に対する配慮も適切に行われている。

資料2-3 中間発表等の形式・回数

専攻	講座名	修士論文の中間発表会の形式	中間発表会の時期，回数
人間学	哲学・倫理学	講座としての発表会（その他授業の中で適宜）	1-2回
	芸術学	授業の中で適宜	
	比較文化学		
行動科学	心理学	合同演習形式	1年次末1回，2年次前期1回後期1回
	社会学・文化人類学	合同ゼミ	各学期1回
	地理情報学	博士課程と一緒に年2-3回の「東アジア研究会」での発表，その他毎週の授業の中で	2-3回
歴史文化学	日本史学	授業の中で，その他学会に発表させる	年4回
	歴史文化論	修士論文発表会	年4回
	考古学	演習の場で	月1-2回
言語文化学	言語学	授業の中で1回～4回，秋頃，中間発表会，また在学中の学会発表を義務づけている。	左記
	日本言語文化論	授業または学会	
	アジア言語文化論	地方学会で2年次生は発表，また卒論演習で年1回発表	左記
	英語圏言語文化論	岡山英文学会で発表，学生の自主的中間発表会（月1-2回）	左記
	ヨーロッパ言語文化論	支部学会で発表	1回

出典：アンケート 2

### 観点C：教育内容等の研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）への取組（教員相互の授業見学などを含む）

（取組状況）

文学部に設置されたFD専門委員会（平成13年度まではFD委員会）が，大学院教育についても検討対象にしている。その中で，FD専門委員会は，複数の教員と学生が共同して学習・研究する場を設けて，相互研修を図るようという提言を，本研究科委員会に対して行った。実際，合同演習や中間発表会という形で，講座の複数の教員が共同して行う授業があり，このような場を通じて，それぞれの教員の教育指導の成果を相互確認する機会を設けているところもある（資料2-3）。ただし，授業参観は学部の授業については行われているが，大学院の授業にどのように導入するかは検討中である。

（分析結果）

教育目標(3)-4及び(3)-6に対応するこれらの取組は相応である。

（根拠理由）

FD専門委員会が活発に活動しており，大学院教育についても分析・提言を行い，大講座の特性を生

かした相互研修を充実させる方針をとっている（資料2-4）。また、授業参観の導入についても検討している。

#### 資料2-4 FD委員会による提言

<u>文学部・文系大学院における教育改革の方向</u>	
文学部FD委員会	<p>B 大学院</p> <p>1 修士課程にあつては、学生の志望・知的要求が多様であることを考慮して、様々な研究分野について自由に総合的な学習・研究が可能となるよう、専攻の枠組みの改編等によって、専攻間の垣根を低くする。</p> <p>2 文学部を卒業していない社会人等が3年程度で修士課程を修了することができるよう、カリキュラム等において特別な配慮を行なう。</p> <p>3 学生が、研究や留学等に必要な十分な外国語能力を身につけるため、外国語科目を設ける。</p> <p>4 研究者を志望する学生の場合、修士・博士課程において一貫した教育を行なうことが望ましい。</p> <p>5 修士・博士課程においては、専攻内あるいは専攻の枠を越えて、複数の教官と学生が共同して学習・研究する場を設け（コロキウム）、これに参加した学生に単位を認める。</p> <p>6 特に博士課程においては、習得した高度な専門知識や研究成果を教授・発表する場として、学会活動や大学内外の教育活動に参加しうよう、指導・援助する。</p>

出典：FD専門委員会活動報告より

### 要素2の貢献の程度

以上の観点ごとの自己評価結果から、授業（研究指導を含む）の内容に関する取組状況は、教育目的及び目標の達成に相応に貢献している。

#### **（2）評価項目の水準**

以上の自己評価結果を総合的に判断して、教育内容面での取組は、教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。

#### **（3）特に優れた点及び改善点等**

少人数教育を徹底し、講座で協力しあいながら教育している。夜間開講科目の充実に努め、社会人学生の勉学に十分に配慮している。また、行動科学専攻には長期在学コースを設け、社会人や他の分野の学部を出た学生に配慮している。ただし、学生による授業評価を導入することなどは、改善が必要である。

---

### 3 教育方法及び成績評価面での取組

---

#### (1) 要素ごとの評価

##### (要素1) 授業形態，研究指導法等の教育方法に関する取組状況

###### 観点ごとの評価結果

###### 観点A：教育課程を展開するための適切な研究指導法等

###### (取組状況)

本研究科では，少人数教育を基本に，特講と演習を組み合わせることで専門性を確保するとともに，他分野の授業の履修を求めてきた。修士論文作成の指導は複数教員により行われるよう努めている。

増加傾向にある社会人や留学生に対応して，昼夜開講制を導入するとともに，時間をかけて研究を進められるよう長期在学コースを設置した。

学生にとって教育指導者としての経験を通じて，自己の研鑽や研究の視野を広げる効果が期待できるティーチングアシスタント（以下，「TA」という）の積極的な活用を行っている。

###### (分析結果)

教育目標(3)-1，(3)-2及び(4)-2に対応するこれらの取組は優れている。

###### (根拠理由)

各専攻は，少人数によるきめ細かな教育を実践している（資料1-5（頁 8），資料3-1）。また，授業の形式は特講，演習が基本であり，各講座ともに高度な専門性を確保している（資料2-1（頁 14～17））。他方，他分野の授業の履修を間接的に求めることにより，社会的要請に応ずる人材を育成している。

修士論文の作成をはじめとした研究指導は講座内の1指導教員を主体としながらも（資料3-2），複数教員によりほぼ週1回のペースできめ細かく行われている（資料3-3）。アンケート 1によれば，回答者の内68.6%が「相談する機会がある」と回答している（資料3-4）ことに加え，その内8割以上が教員への相談を有効であったと考えている（資料3-5）ことから，本研究科の学生は将来の方向性を考える際に教員を信頼しており，研究意欲の向上と将来への自覚を醸成する環境が整備されているといえる。

社会人入学の増加（資料3-1）にともない，効率的に研究を進められるよう昼夜開講制を導入し，17時40分以降の授業を開講するように努め（資料3-6），学生の多様化に柔軟に対応している。また，時間をかけて教育を受けられるよう長期在学コースを設置し，平成13年度は2人，平成14年度は1人が入学している（資料3-1）。

TAの積極的な活用に努めている（資料3-7）。アンケート 1によれば，TAに任用された学生の9割が「良かった」と回答しており（資料3-8），教育指導者としての経験を通じて，自己の研鑽や研究の視野を広げる効果が期待できるばかりでなく（資料3-9），TAは教員及び学生にとって教育上の大きな支援となっている。

## 資料3-1 専攻別大学院入学者数の推移（人）

専攻	種別	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度
人間学	一般	6	3	10	4
	社会人	0	3	3	3
	小計	6	6	13	7
行動科学	一般	6	6	7	14
	社会人	2	1	2	0
	長期在学	-	-	2	1
	小計	8	7	11	15
歴史文化学	一般	12	10	11	9
	社会人	1	2	2	2
	小計	13	12	13	11
言語文化学	一般	12	20	13	13
	社会人	0	5	2	3
	小計	12	25	15	16
文学研究科計	一般	36	39	41	40
	社会人	3	11	9	8
	長期在学	-	-	2	1
	合計	39	50	52	49

出典：学務関係資料

注1：長期在学コースは平成13年度より実施した。

注2：平成11年度改組により平成11年度以降について作成

## 資料3-2 研究指導の際の教員属性

講座内の1指導教員	29(56.9)
講座内の複数教員	19(37.2)
他講座も含めた複数教員	2( 3.9)
他専攻も含めた複数教員	0( 0.0)
その他	0( 0.0)
無回答	1( 2.0)
計	51

出典：アンケート 1

注：( )内は割合(%)

## 資料3-3 研究指導頻度

毎日	2( 3.9)
週1回	25(49.0)
月1回	13(25.5)
その他	9(17.7)
無回答	2( 3.9)
計	51

3週間に1回
2～3ヶ月に1回
半年に1回
不定期 (6件)

出典：アンケート 1

注：( )内は割合(%)

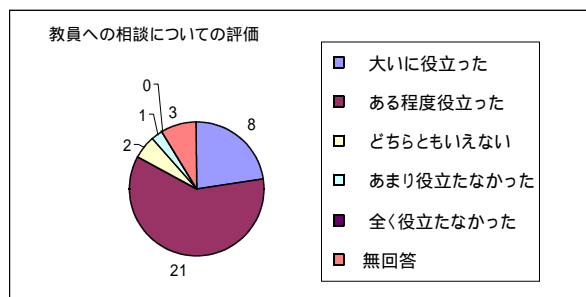
資料3-4 将来の方向性に関して教員と相談する機会の有無

相談する機会がある	35(68.6)
ない	14(27.5)
無回答	2( 3.9)
計	51

出典：アンケート 1  
注：( )内は割合(%)

資料3-5 教員への相談についての評価

大いに役立った	8 (22.9)
ある程度役立った	21 (60.0)
どちらともいえない	2 ( 5.7)
あまり役立たなかった	1 ( 2.8)
全く役立たなかった	0 ( 0.0)
無回答	3 ( 8.6)
計	35



出典：アンケート 1  
注：( )内は割合(%), 総数は資料3-4において を選択した回答者数

資料3-6 文学研究科時限別授業数の推移

時 限	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度
1 限 ( 8 : 40 ~ 10 : 10 )	8	13	13	14	5
2 限 ( 10 : 20 ~ 11 : 50 )	34	33	38	32	35
3 限 ( 12 : 40 ~ 14 : 10 )	26	30	39	39	45
4 限 ( 14 : 20 ~ 15 : 50 )	31	34	32	36	39
5 限 ( 16 : 00 ~ 17 : 30 )	27	32	29	27	27
6 限 ( 17 : 40 ~ 19 : 00 )	-	-	9	15	24
7 限 ( 19 : 20 ~ 20 : 50 )	-	-	0	2	2
計	126	142	160	165	177
17:40以降の授業割合	-	-	5.6%	10.3%	14.7%

出典：各年度版岡山大学大学院文学研究科授業時間表より  
注：昼夜開講制は平成12年度より実施したため平成10・11年度については6・7限の授業は組まれていない。

資料3-7 TAの雇用実績 (人)

専 攻	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度
人間学	2	4	6	10	7
行動科学	5	4	6	12	15
歴史文化	5	7	11	13	10
言語文化	1	1	2	4	5
合計	13	16	25	39	37

出典：文学部TA集計結果より

## 資料3-8 TAについての評価

任用されて良かった	25 ( 89.3 )
そうは思わない	3 ( 10.7 )
計	28

出典：アンケート 1

注：( )内は割合(%), 総数はTA該当者のみ

## 資料3-9 TA制度の利点

経済的理由	22 ( 78.6 )
教育指導者としての経験	8 ( 28.6 )
自己研鑽	11 ( 39.3 )
研究視野の拡大	11 ( 39.3 )
学部生との交流	11 ( 39.3 )

出典：アンケート 1

注1： ~ は複数回答

注2：( )内はTA該当者28名中選択した人数の割合(%)

**観点B：研究指導法等についての配慮**

( 取組状況 )

学生が修士論文の作成や研究を進展させていく過程において、その研究テーマの決定には自主性が重んじられなければならないが、他方、指導教員の適切なアドバイスも必要である。そのため、少人数教育の利点を活かし、各学生個人の状況に応じた指導を行うよう努めてきた。

また、学生に対して、学会発表や雑誌への投稿、さらに、共同研究への参加を促すなど、学外との接触を通じて研究の向上に努めるよう指導している。

( 分析結果 )

教育目標(3)-2及び(4)-2に対応するこれらの取組は相応である。

( 根拠理由 )

アンケート 1によれば、本人の希望を優先させるとともに、講座内の複数教員の話し合いを通じて、指導教員が決定されている(資料3-10)。アンケート回答者の内78.4%の学生が教員との相談により研究テーマを決定していると回答しており(資料3-11)、少人数教育の利点を活かし、各学生個人の状況に応じた指導を行うとともに、複数教員による指導を積極的に進めつつある(資料3-12)。

本研究科の講座の中には、独自の学会を有している講座もあり(資料3-13)、これらの存在は学生の研究の向上に大いに寄与している。学生のなかには全国規模の学会に所属したり(資料3-14)、複数の学会に所属している者も少なくない(資料3-15)。また、学生は積極的に学会発表や学会誌への投稿(資料5-4(頁50))を行っており、さらには共同研究への参加も見られる(資料3-16)など、対外的な接触を通じた学生の研究の発展が促されている。

## 資料3-10 指導教員の決定方法

自分の希望	34 (66.6)
講座から指定	3 (5.9)
講座の教員と相談	12 (23.5)
その他	1 (2.0)
無回答	1 (2.0)
計	51

他大学教員の紹介

出典：アンケート 1  
注：( )内は割合(%)

## 資料3-11 研究テーマの決定方法

自分のみ	9 (17.6)
教員と相談	40 (78.4)
教員から指定	1 (2.0)
無回答	1 (2.0)
計	51

出典：アンケート 1  
注：( )内は割合(%)

## 資料3-12 研究テーマ決定の際の教員属性

講座内の1指導教員	29 (70.8)
講座内の複数教員	8 (19.5)
他講座も含めた複数教員	0 (0.0)
他専攻も含めた複数教員	2 (4.9)
その他	1 (2.4)
無回答	1 (2.4)
計	41

事務官との相談

出典：アンケート 1  
注1：( )内は割合(%)  
注2：総数は資料3-11において 及び を選択した回答者数

## 資料3-13 学会一覧

専攻	講座	学会名
人間学	哲学・倫理学	岡山大学哲学倫理学会
行動科学	心理学	岡山心理学会
	地理情報学	地域地理科学会
		東アジア研究会
歴史文化学	歴史文化論	六朝刻文史料研究会
		岡山アジア研究会
	日本史学	岡山地方史研究会
		岡山古代史研究会
考古学	考古学研究会	
言語文化学	言語学	岡山大学言語学研究会
	日本言語文化論	岡山大学言語国語国文学会
		国語談話会
		日本語研究会
	英語圏言語文化論	岡山英文学会
ヨーロッパ言語文化論	ヨーロッパ言語文化研究会	

出典：アンケート 1

## 資料3-14 学生の所属学会一覧

学会名	学生数
岡山英文学会	7
日本行動分析学会	3
岡山大学哲学倫理学会	3
岡山心理学会	2
考古学研究会	2
日本社会心理学会	2
大阪歴史学会	1
岡山近代史研究会	1
岡山地方史研究会	1
海域アジア史学会	1
香川歴史学会	1
魏晋南北朝研究会	1
健康心理学会	1
国語学会	1
社会経済史学会	1
新青年研究会	1
地域地理科学会	1
中四国英文学会	1
長沙呉簡研究会	1
地理教育学会	1
東南アジア史学会	1
日本英文学会中四国支部	1
日本エミリイ・デイキンソン学会	1
日本エリオット学会	1
日本語教育学会	1
日本史研究会	1
日本心理学会	1
日本地理学会	1
日本ナサニエル・ホーソン協会	1
日本民族学会	1
ノートルダム清心女子大学	1
英語英米文学研究会	
東アジア恠異学会	1
南アジア学会	1
六朝刻文史料研究会	1

出典：アンケート 1

資料3-15 所属学会数別学生数

	学 生 数
3学会	3 ( 5.9 )
2学会	10 ( 19.6 )
1学会	18 ( 35.3 )
なし	20 ( 39.2 )
計	51

出典：アンケート 1

注：( ) 内は割合(%)

資料3-16 共同研究への参加状況

学会名	研究代表者	代表者の所属先	研究期間	担当した研究内容
六朝刻文史 料研究会	佐藤智水	岡山大学	2002年4月 ～9月	北斎天統三年標異郷石 柱頌銘文の解読

出典：アンケート 1

**要素1の貢献の程度**

以上の観点ごとの自己評価結果から、授業形態、研究指導法等の教育方法に関する取組状況は、教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。

**(要素2) 成績評価法に関する取組状況****観点ごとの評価結果****観点A：成績評価基準の設定**

(取組状況)

講義や演習に対する成績評価基準はシラバスに明記することにより、研究科全体として学生に対して周知するよう取り組んできた。

成績評価に関しては教員個人の判断に委ねるところが大きいですが、文学部規程及び文学部成績評価基準を準用し、レポートやペーパーテストだけでなく、討論への参加状況や報告内容など多面的に評価を行うよう努めている。

(分析結果)

教育目標(3)-3に対応するこれらの取組は優れている。

(根拠理由)

講義や演習に対する成績評価基準はシラバスに統一された書式により明記することにより、研究科全体として学生に対して周知の徹底を行っている(資料3-17)。

成績評価に関しては、文学部規程にある「多元的な成績評価基準」(「岡山大学文学部規程」第6条の2、並びに資料3-18「岡山大学文学部成績評価基準」)を準用し、レポートやペーパーテストだけでなく、討論への参加状況や報告内容など多面的に評価を行っている。

成績評価は、若干「優」に偏りがあるものの、比較的バランスのとれた状況にあり(資料3-19)、アンケート 1の調査結果によれば、こうした成績評価に対して学生はおおむね納得している(資料3-20、資料3-21)。

資料3-17 平成14年度における成績評価基準別授業数

成績評価基準	授業数	割合(%)
出席	16	9.0
出席・レポート	44	24.9
出席・レポート・発表	23	13.0
出席・発表	17	9.6
出席・発表・試験	1	0.6
出席・試験	8	4.5
出席・レポート・試験	7	4.0
レポート	17	9.6
レポート・発表	20	11.3
レポート・試験	3	1.7
発表	5	2.8
発表・試験	2	1.1
試験	5	2.8
総合的	5	2.8
その他	4	2.3
計	177	100.0

出典：『平成14年度岡山大学大学院文学研究科シラバス』より

資料3-18 岡山大学文学部成績評価基準（平成12年10月18日 文学部教授会決定）

<p>岡山大学文学部規程（平成7年岡山大学文学部規程第1号）第6条の2の規定に基づき、岡山大学文学部成績評価基準を次のように定める。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 成績評価は、出席状況、受講態度、報告・発表状況、レポート、試験など多様な要素を組み合わせで行うものとする。一回の試験又は一回のレポート提出のみで成績評価を行うことはしない。</li> <li>2 試験、レポート等は、成績評価の際に、受講及び受講のための学習準備を通じて得られた学習効果が、適切に反映されるよう課題設定を工夫するものとする。</li> <li>3 各授業科目の成績評価の方法等は、シラバス（講義要覧）に明記するとともに、各授業において、学習目標と関連付けながら説明するものとする。また、優、良、可及び不可等の区分についても、併せて明瞭に説明する。</li> <li>4 ガイダンス科目及び外国語科目のように、性格を同じくする授業科目を複数コマ開講する場合の成績評価の方法等は、担当教員による評価の差が生じないように、相互に調整し、可能な限り統一するものとする。また、1授業科目を複数の教員で担当する場合も同様とする。</li> <li>5 卒業論文については、オリエンテーション等を通じて、成績評価の方法等を明瞭に説明するとともに、成果に応じた適切な成績評価を行うものとする。なお、成績評価に当たっては、卒業論文そのものはもとより、口述試験における受け答え及び卒業論文作成過程における学生の勉学態度についても、併せて勘案するものとする。</li> <li>6 成績評価に関する学生の質問及び疑問等には、適切に対応するものとする。</li> </ol>
--

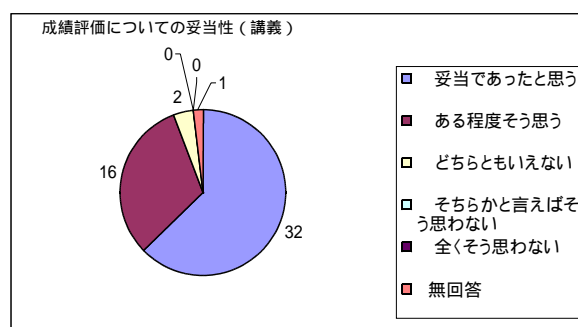
出典：文学部教授会資料より



資料3-20 成績評価についての妥当性（講義）

妥当であったと思う	32 (62.7)
ある程度そう思う	16 (31.4)
どちらともいえない	2 (3.9)
そちらかと言えばそう思わない	0 (0.0)
全くそう思わない	0 (0.0)
無回答	1 (2.0)
計	51

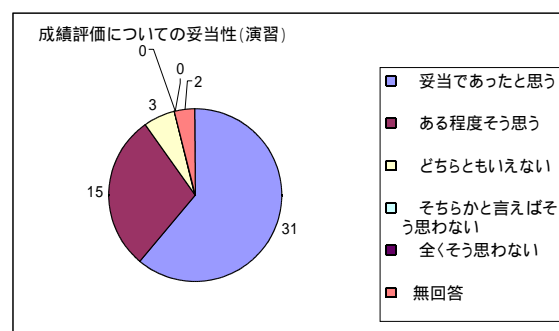
出典：アンケート 1  
注：( )内は割合(%)



資料3-21 成績評価についての妥当性（演習）

妥当であったと思う	31 (60.8)
ある程度そう思う	15 (29.4)
どちらともいえない	3 (5.9)
そちらかと言えばそう思わない	0 (0.0)
全くそう思わない	0 (0.0)
無回答	2 (3.9)
計	51

出典：アンケート 1  
注：( )内は割合(%)



## 観点B：学位の授与方針・基準の設定

### （取組状況）

学位授与方針及び基準は岡山大学大学院学則及び岡山大学学位規則により明確化されている。本研究科においては、それを踏まえて岡山大学大学院文学研究科規程を定め、さらに学位論文及び最終試験の審査決定方法等について規程を設けている。これにより、複数の教員による審査を義務づけてきた。また、論文審査報告書及び最終試験報告書は研究科委員会において厳格な審議を行うことにより客観性を確保するとともに、高い水準の学位論文並びに最終試験結果を要求するように努めている。

### （分析結果）

教育目標(3)-3に対応するこれらの取組は相応である。

### （根拠理由）

本研究科規程（「岡山大学大学院文学研究科規程」第10条及び第11条）を踏まえて、本研究科においては「学位論文及び最終試験の審査決定方法等について」（資料3-22）を定め、これにより学位授与方針及び基準はより厳密なものとなっている。

複数教員による審査や論文審査報告書及び最終試験報告書の研究科委員会での審議などの制度が整備され、適切に運用されている。

資料3-22 岡山大学大学院文学研究科学位論文及び最終試験の審査決定方法等について  
(平成11年12月15日一部改正 文学研究科委員会決定)

- 1 論文提出について  
学位の授与を受けようとする学生は、所定の学位申請書に学位論文を添えて、12月25日午後5 時まで教務学生係に提出すること。  
なお、当日が休日(土曜日、日曜日及び国民の祝日に関する法律に規定する休日をいう。以下同じ。)の場合は、その翌日の午後5時までとし、連休となる場合は、最終休日の翌日の午後5 時までとする。
- 2 前期修了を希望する者は、所定の学位申請書に学位論文を添えて、7月31日午後5時まで教務学生係に提出すること。  
なお、当日が休日の場合は、第1項の規定を準用する。
- 3 審査及び最終試験について  
学位論文の審査及び最終試験は、各専攻でそれぞれ実施する。なお、審査は、2名以上の教員をもって行うものとする。
- 4 論文審査報告書及び最終試験報告書提出について  
論文審査報告書及び最終試験報告書は、研究科委員会に提出する。
- 5 研究科委員会の議決について  
各専攻により提出された報告書に基づき、研究科委員会で学位授与の合否を決定し、学長に報告する。

出典：文学研究科委員会資料

## 要素2の貢献の程度

以上の観点ごとの自己評価結果から、成績評価法に関する取組状況は、教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。

## (要素3) 施設・設備の整備・活用に関する取組状況

### 観点ごとの評価結果

#### 観点A：施設の整備・活用

(取組状況)

本研究科においては、少人数教育を推進するために、専攻ごとに演習室や実験室を確保するばかりでなく、学生に対しできるかぎり部屋を用意し、随時利用できるように電子錠を貸与するなど便宜を図っている。講義室や演習室へのエアコンの設置やAV機器の充実化、コピー機の設置など、研究遂行の上で間接的に寄与しうる設備の整備に努めている。

本学附属図書館には学生用の研究個室(8部屋)、学習用個室(5部屋)、グループ学習室(1部屋)、共同研究室(2部屋)が用意されている。総合情報処理センターには情報実習室が4室(第1実習室：端末51台、第2実習室：端末101台、第3実習室：16ポート、第4実習室：端末51台)あり、文化科学系総合研究棟の共同端末室(端末60台)とあわせて、学生の研究遂行に寄与している。

さらに、附属図書館や総合情報処理センターなどの関連施設の積極的な活用を図っている(資料3-23、資料3-24)。

(分析結果)

教育目標(3)-5及び(4)-3に対応するこれらの取組は優れている。

(根拠理由)

各専攻ごとに演習室や実験室などが整備されるとともに、学生が常時研究に専念できる研究室も確保してきた(資料3-25)。さらに、学生用の机やコンピューターも整備されつつある(資料3-26)。また、夜間や休日などの時間外における研究室の使用については、各学生が電子錠を保持しており、24時間使用可能な状況である。

資料3-23

2002年度 貸出統計

	貸出冊数
文学研究科	2,184

出典：附属図書館統計より

資料3-24

総合情報処理センター系 情報実習室 利用状況（2003年 4月） 按時

情報実習室名	情報実習室1	情報実習室2	情報実習室4	文法館：林同隆実習室
台数	50	100	50	59
日付				
1		56	2	26
2		45		16
3		51		20
4		31	37	25
5				2
6				1
7	2	81	4	32
8		65	6	24
9	54	195	56	39
10	33	159	65	40
11	16	123	39	41
12				1
13				
14	81	122	101	56
15	25	256	86	98
16	15	242	77	60
17	54	259	129	106
18	73	276	81	66
19				1
20				1
21	94	236	129	75
22	79	223	118	94
23	17	240	72	64
24	63	226	142	112
25	70	238	69	67
26				3
27				2
28	103	228	114	78
29				1
30	22	277	104	52
利用者数合計	801	3629	1431	1203
稼働日数	16	21	19	29
平均利用率（1室1日当たり）	50.1	172.8	75.3	41.5
平均稼働率（1台1日当たり）	1	1.7	1.5	0.7

利用者数（その日のうちに1回以上利用した人の数。延べ人数ではありません。）

出典：総合情報処理センター利用状況調べ（2003年 4月）

資料3-25 専攻別教室数一覧

	人間学	行動科学	歴史文化学	言語文化学	共 通
大学院研究室	2	2	2	2	
演習室	2	2	5	8	1
実験室	1	8	1	1	
実習室		2			
資料室		3	5	4	1
準備室		1		1	
研究室	1		1		
その他		9	1		

出典：『平成14年度学生便覧』より

注1：その他の教室は脳波室，面接室，観察室，防響室など

注2：教室数は一般教育棟に所在するものも含む

資料3-26 講座別設備状況調べ

講 座	大学院生用机数	コンピューター数
哲学・倫理学	12	4
芸術学		
比較文化学		
心理学	12	6
社会学・文化人類学	各学生に各1机	6
地理情報学	5	3
日本史学	1.5人に1机共有	1
歴史文化論	2人に1机共有	1
考古学	6	1
言語学	6	1
日本言語文化論	10	1
アジア言語文化論	5（学部と共有）	1
英語圏言語文化論	5	1
ヨーロッパ言語文化論	各学生に各1机	1

出典：アンケート 2

### 観点B：関連設備，図書等の資料の整備・活用

（取組状況）

本学附属図書館ではOPACによる所蔵図書，資料や雑誌のオンライン検索システムの充実を図ってきた。こうしたハード面の充実とともにソフト面においても，新聞データベースや電子ジャーナルなど様々な情報提供を行っている。こうした情報を最大限に利用できるよう，各研究室に学内LANの段階的な高度化と配備に取り組んできた。また，附属図書館では学外資料の取り寄せや，修士論文作成期間における貸し出し延長サービスなどの取り組みを行っている。さらに，池田家文庫をはじめとした貴重な古文書類の活用も進めつつある。

一方，総合情報処理センターでは統計処理用のソフトウェアをはじめとして，各種ソフトウェアを

利用することができるよう配慮されている。

(分析結果)

教育目標(3)-5及び(4)-3に対応するこれらの取組は相応である。

(根拠理由)

各研究室に完備され継続的に高度化された学内LANによって図書館の利用が簡便となり、学生の研究遂行に大いに貢献している。本研究科学生による図書館利用も活発である(資料3-23)。

総合情報処理センターではインターネットへの接続が可能であることに加え、MS-Office2000Proや一太郎10などのワープロや表計算ソフトが利用可能なほか、BASICやFORTRAN90などのプログラミング言語、SPSSなどの統計処理用のソフトウェアに関しても利用可能である。さらに、文化科学系総合研究棟にも共同端末室があり、学生の研究遂行に寄与している。

### **要素3の貢献の程度**

以上の観点ごとの自己評価結果から、施設・設備の整備・活用に関する取組状況は、教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。

## **(2) 評価項目の水準**

以上の自己評価結果を総合的に判断して、教育方法及び成績評価面での取組は、教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。

## **(3) 特に優れた点及び改善点等**

徹底した少人数教育のもとで、専門性と総合性を兼ね備えた社会的要請に応ずる高度な専門的職業人及び研究者の育成をはかってきた点、少人数教育の利点を活かし、学生の研究意欲を高めるとともに自らの将来の方向性を認識できるような環境を整備してきた点、さらには、増加傾向にある社会人や留学生に対しても、効率的に研究を進められるよう昼夜開講制を導入しただけでなく、時間をかけて研究を進められるよう長期在学コースを設置した点は特に優れていると考えられる。その一方で、施設の老朽化に伴い、時代に対応した施設・設備の整備が困難になりつつあることも否めない。

## 4 教育の達成状況

### (1) 要素ごとの評価

#### (要素1) 学生が身に付けた学力や育成された資質・能力の状況から判断した達成状況

観点ごとの評価結果

観点A：単位取得，進級，修了（修士の学位取得）及び資格取得などの各段階の状況からの判断  
（達成状況）

本研究科の修了資格単位数は，必修科目16単位と選択科目14単位をあわせた30単位である。平成12年度から14年度において修了時における学生の平均単位取得数は，文学研究科全体で35.3単位であり，修了資格単位数を幾分上回っている。また修了生の取得した単位数の最高と最低は資料4-1の通りである。

平成12年度から14年度までの修了生のうち2年間で修了した者の割合は，平成12年度56.4%，13年度50%，14年度52%である（資料4-2）。また行動科学専攻では，他分野の学部から入学した学生などに対して，平成13年度より修了年限が3年の長期在学コースを設けており，このコースの一年次生には，特に学部授業の履修・聴講を奨励して，理論的枠組みや研究方法論の基礎を身に付けさせるように配慮している。

学生は，指導教員の指導の下に修士論文を執筆し，それを通して研究の方法や姿勢を身に付けていく。修士論文の作成を通して培われた様々な能力は，博士課程に進学した場合のみならず，一般企業等に就職した場合も，きわめて有益であると思われる。平成12年度から14年度までの修士論文の成績は，本研究科全体で合102名，否13名であり，合格率は88.7%である。学科別の過去3年間の合格率をみると，人間学科100%，行動科学科75.0%，歴史文化学科83.9%，言語文化学科93.3%であり，行動科学専攻で合格率がやや低い（資料4-3）。

修士課程在籍中の学生の学会での口頭発表の件数と学会誌への投稿件数は，資料5-4（頁50）の通りである。

休学者数（改組後入学した学生のみ）と退学者数は資料4-4の通りである。休学者の数がやや多いように思われるが，その中には留学による者も含まれるものの，大半は一身上の都合や家庭の事情，経済的理由によるものである。

平成12年度から14年度までの教員免許状取得者は，資料4-5の通りである。免許状取得者の実数は平成12年度9名，13年度10名，14年度8名であり，修了生全体に対する割合としては，平成12年度39.1%，13年度27.8%，14年度18.6%となる。教員採用者数の減少にともない実際に教員になる者は限られているものの，依然としてかなりの者が在学中に教員免許状を取得している。

（分析結果）

教育目的(1)-1，(1)-2及び(1)-3に対応するこれらの取組は相応である。

（根拠理由）

修了生のうち過去3年間では52.8%の者が2年間で修了している。修士論文の合格率は84.9%でおおむね良好である。2年間で修了できない者のほとんどは修士論文の作成に時間がかかっているためである。修士論文の作成が遅れている者については，指導教員を中心に一層の学習指導と支援を行う必要がある。

## 資料4-1 修了年度別修得単位数

専攻名	年 度	最大修得単位数	最小修得単位数	平均修得単位数	3年間の平均取得単位数
人間学専攻	平成12年度	42	42	42.0	37.9
	平成13年度	62	30	36.8	
	平成14年度	48	30	34.8	
行動科学専攻	平成12年度	34	30	31.3	33.9
	平成13年度	38	32	34.0	
	平成14年度	42	32	36.3	
歴史文化学専攻	平成12年度	46	30	33.8	34.0
	平成13年度	38	30	34.3	
	平成14年度	40	30	34.0	
言語文化学専攻	平成12年度	36	30	31.1	35.3
	平成13年度	44	30	36.0	
	平成14年度	54	30	38.8	

出典：学務に関する調査より

注：平成11年度改組により平成12年度以降について作成

## 資料4-2 その1 学位授与状況

(学位授与数の上段は規定の年限内で修了した者の数を表す)

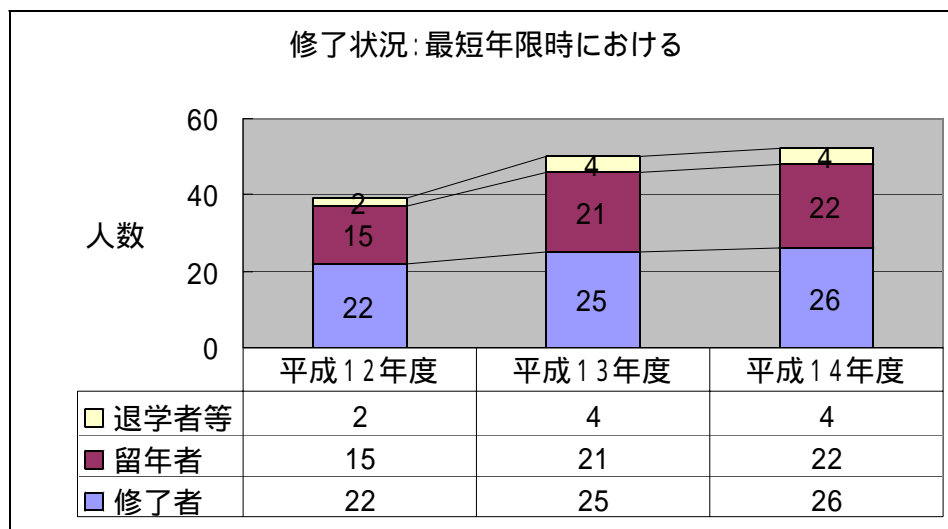
専攻	区分	種類	学位授与数		
			平成12年度	平成13年度	平成14年度
人間学専攻	修士	文学	1 ( 6 )	4 ( 6 )	8 ( 13 )
			1	8	10
行動科学専攻	修士	文学	3 ( 8 )	4 ( 7 )	4 ( 11 )
			3	5	7
歴史文化学専攻	修士	文学	9 ( 13 )	5 ( 12 )	4 ( 13 )
			* 10	8	8
言語文化学専攻	修士	文学	9 ( 12 )	12 ( 25 )	10 ( 15 )
			9	15	18
計			22 ( 39 )	25 ( 50 )	26 ( 52 )
			23	36	43

出典：学務に関する調査より

注1：( )内は入学者数を表し，\*は，歴史文化学専攻の10名は再入学者1名を含む。

注2：平成11年度改組により平成12年度以降について作成

資料4-2 その2 最短修了年限時における状況



出典：学務に関する調査より

注1：平成14年度修了者（平成13年度入学）のうち2名は長期履修コース入学者のため修了率算出時は50人とする。

注2：平成11年度改組により平成12年度以降について作成

資料4-3 修士論文の合否数

専攻	平成12年度		平成13年度		平成14年度		計	
	合	否	合	否	合	否	合	否
人間学専攻	1	0	8	0	10	0	19	0
行動科学専攻	3	2	5	2	7	1	15	5
歴史文化学専攻	10	1	8	2	8	2	26	5
言語文化学専攻	9	0	15	3	18	0	42	3
計	23	3	36	7	43	3	102	13

出典：教務学生係集計結果より

注：平成11年度改組により平成12年度以降について作成

資料4-4 年度別の休学者と退学者

(1) 休学者

年 度	人間学	行動科学	歴史文化学	言語文化学	計
平成11年度	0	0	0	0	0
平成12年度	1	0	0	0	1
平成13年度	1	3	4	1	9
平成14年度	5	1	6	5	17
計	7	4	10	6	27

出典：教務学生係集計結果より

注：平成11年度改組により平成11年度以降について作成

## (2) 退学者

年 度	人間学	行動科学	歴史文化学	言語文化学	計
平成11年度	1	0	0	0	1
平成12年度	0	0	1	0	1
平成13年度	0	3	2	1	6
平成14年度	1	3	1	1	6
計	2	6	4	2	14

出典：教務学生係集計結果より

注：平成11年度改組により平成11年度以降について作成

## 資料4-5 文学研究科教員免許状取得状況

年 度	修了者数（改組後の修了生のみ）	免許状取得者の実数	中学校教諭専修免許状	高等学校教諭専修免許状
平成12年度	23	9	2	9
平成13年度	36	10	3	11
平成14年度	43	8	7	8

出典：教務学生係集計結果より

注：平成11年度改組により平成12年度以降について作成

## 要素1の達成の程度

以上の観点ごとの自己評価結果から、学生が身に付けた学力や育成された資質・能力の状況から判断した達成状況は、教育目的及び目標において意図する教育の成果が相応に達成されている。

## (要素2) 進学や就職などの修了後の進路の状況から判断した達成状況

## 観点ごとの評価結果

## 観点A：進学や就職などの修了後の進路の状況からの判断

## (達成状況)

平成10年度から14年度までの修了生の進路状況は資料4-6の通りである。修了者全体に占める進学者の割合は5年間平均26.4%である。本学文化科学研究科への進学制度が整備された平成13年度以降には、13年度6名、14年度7名が同研究科へ進学している。他大学では、北大、東北大、阪大、神大、関西大、川崎医療福祉大等に進学している。これは、研究のさらなる継続を学生が希望しているためである。

修了者のうち就職希望者の割合は5年間平均して55.7%であり、そのうち就職決定者の割合は平均76.6%である。内訳は官公庁が最も多くて33.3%、このうちには専門性を生かした学芸員などとして採用される者も多い。次いで大企業30.6%、教員18.1%、中小企業13.9%となっている。

## (分析結果)

教育目標(1)-1、(1)-2及び(1)-3に対応するこれらの取組は優れている。

## (根拠理由)

修了生全体に占める進学者の割合は、ほぼ4分の1程度で平均的に推移している。就職者のうち、官公庁や教員など専門性を生かした道に進む者が51.4%を占めている。これらを合わせると進路決定者の118名のうち70.3%の者が、博士課程・官公庁・教員の道に進んでいる。これは、専門的職業人や研

究者を育成するという本研究科の教育目的にふさわしいものである。

資料4-6 文学研究科修了者の就職（進学）状況

年 度	修了者数	進 学 状 況			就 職 状 況								そ の 他	就職率 (B)/(A)
		希望 者数	決定 者数	未定 者数	希望者数 (A)	決 定 者 数						未定 者数		
						計 (B)	大企業	中小 企業	教員	官公庁	自営 その他			
平成10年度	(19)	(4)	(4)		(9)	(9)	(1)	(1)	(1)	(4)	(2)		(6)	100.0%
	30	8	8		13	13	2	1	2	6	2		9	100.0%
平成11年度	(17)	(6)	(6)		(10)	(6)	(1)	(3)		(2)		(4)	(1)	60.0%
	32	9	9		18	11	1	6		4		7	5	61.1%
平成12年度	(12)	(3)	(3)		(6)	(5)			(2)	(2)	(1)	(1)	(3)	83.3%
	31	8	8		18	16	2	1	4	8	1	2	5	88.9%
平成13年度	(19)	(7)	(6)	(1)	(10)	(6)	(2)		(1)	(3)		(4)	(2)	60.0%
	37	12	11	1	20	15	7		3	5		5	5	75.0%
平成14年度	(23)	(5)	(5)		(14)	(9)	(3)	(1)	(4)	(1)		(5)	(4)	64.3%
	44	10	10		25	17	10	2	4	1		8	9	68.0%

出典：平成10年度から平成14年度学部卒業生及び大学院等修了者の就職（進学）状況調べより

注：上段（ ）内の数字は女子で内数

#### 観点B：雇用主の修了生に対する評価結果等からみでの判断

##### （達成状況）

本研究科の教育目的においては、人材育成の基本方針として、「人間知に関わる専門性と総合性を兼ね備え、地域社会の各分野で活躍できる高度の専門的知識を持った職業人、研究者の育成を目指す」とされている。平成9年度から13年度において本研究科の修了生を採用した雇用主を対象としたアンケート（平成15年2月実施）は、寄せられた回答からすれば、本研究科が目指すそのような人材育成の目標が、おおむね達成されていると評価できる（資料4-7）。

##### （分析結果）

教育目標(1)-1, (1)-2及び(1)-3に対応するこれらの取組は優れている。

##### （根拠理由）

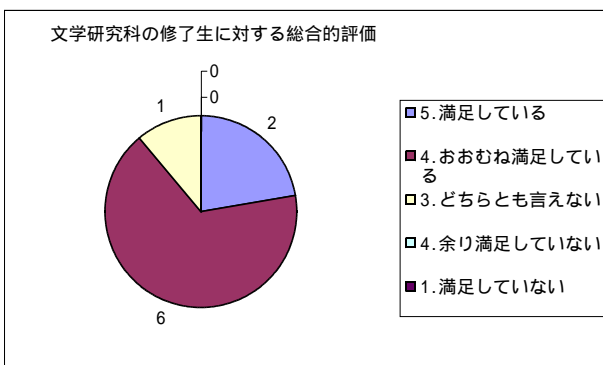
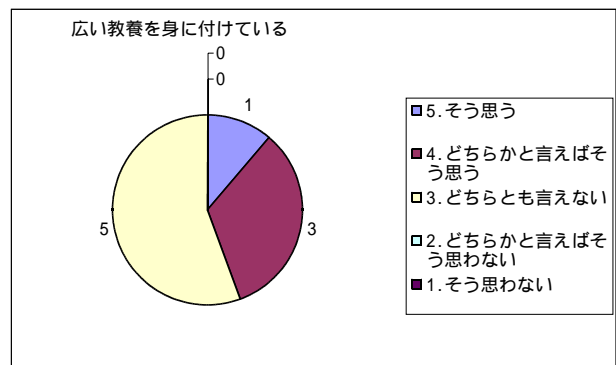
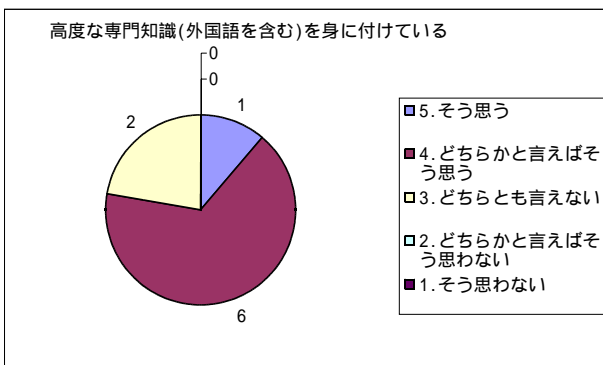
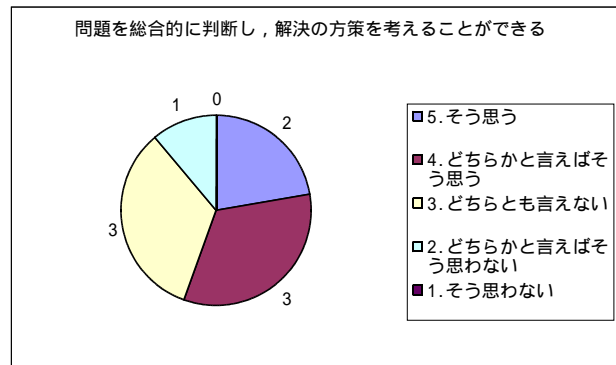
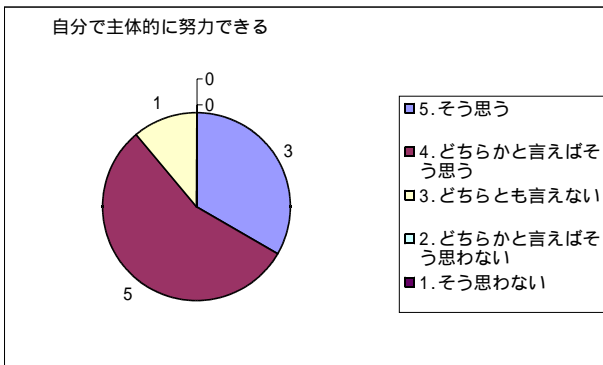
アンケートの回答平均値は、質問 と の平均値がやや低めではあるが、その他の質問の平均値はいずれも4前後であり、「自分で主体的に努力できる」の項の評価が高いのは優れている。本研究科修了生に対する総合的な評価の平均値は、「5.満足している」と「4.おおむね満足している」の間に位置している。

資料4-7 雇用主の修了生に対する評価（配布数14，有効回答数9）

質 問 事 項	回答平均値 (5段階評価)
自分で主体的に努力できる	4.2
問題を総合的に判断し，解決の方策を考えることができる	3.7
高度な専門知識（外国語を含む）を身に付けている	3.9
広い教養を身に付けている	3.6
岡山大学文学研究科修了生に対する総合的評価	4.1

出典：雇用主アンケート結果より

質問 から の回答の選択肢は（5.そう思う 4.どちらかと言えばそう思う 3.どちらとも言えない 2.どちらかと言えばそう思わない 1.そう思わない）であり，質問 の回答の選択肢は（5.満足している 4.おおむね満足している 3.どちらとも言えない 2.余り満足していない 1.満足していない）である。



#### 要素2の達成の程度

以上の観点ごとの自己評価結果から、進学や就職などの修了後の進路状況から判断した達成状況は、教育目的及び目標において意図する教育の成果が十分に達成されている。

#### **(2) 評価項目の水準**

以上の自己評価結果を総合的に判断して、教育の達成状況は、教育目的及び目標において意図する教育の成果がおおむね達成されている。

#### **(3) 特に優れた点及び改善点等**

雇用主の修了生の採用に対する満足度が高いのは、優れている点である。

改組後の2年間における進学者と就職者の割合はかなり高いが、他方、無業者を含むその他の者の割合がやや高いのは問題である。インターンシップ制度など学部で行っているような就職指導を大学院生についても取り入れ、学生の就職活動をより積極的に支援していく体制を整える必要がある。

## 5 学習に対する支援

### (要素1) 学習に対する支援体制の整備・活用に関する取組状況

#### 観点ごとの評価結果

観点A：授業科目や専門、専攻の選択の際のガイダンス

(取組状況)

研究科を挙げてのガイダンスというのは、新入生に対するものだけであり、それ以外は各専攻あるいは講座において個別に実施されている。新入生ガイダンスは例年入学式当日の午後に設定されており、儀礼を排して実務主体に行われる。まず、『学生便覧』や『シラバス』などの資料を配付した上で、履修登録方法や修了要件など履修に関することを中心に概略的な説明がなされる(資料5-1)。その後は学生が所属する講座に分かれ、教員の紹介に続いて、単位の取り方・授業科目の特性・修士論文の書き方等についての詳細なガイダンスが行われる。指導教員の決定も通常この時になされる。

学部生とは異なり、大学院学生の場合は研究計画や目的意識が極めて明らかなので、指導も当初より専門性の強化に向けられることになる。学生は、必要な授業の履修を行いながら、計画的に修士論文の作成に取り組んでいる。従って指導も、この目的を達成するために、彼等のテーマに最も近い領域の専門知識を有した指導教員により、定期的かつ密接に行われている。

(分析結果)

教育目標(4)-1に対応するこれらの取組は相応である。

(根拠理由)

入学ガイダンスの際に資料として用いられる『学生便覧』と『シラバス』は、これまで段階的に改善され、大学全体としての統一もなされているので、学生の手引きとして十分に機能していると判断される。講座による導入も満足できるものであり、他大学から進学して来た学生においても、履修上の問題は例年ほとんど生じていない。

また、本研究科は人文学をほぼ網羅する多岐にわたる専門分野の教員で構成されており、幅広い学生の興味関心に十分に答えることができている。近年増加しつつある学際的な研究テーマに対しても、隣接する領域の教員が協力し合って指導に当たっている。

#### 資料5-1 平成14年度新入生オリエンテーション日程

期日：平成14年4月8日入学式終了後	場所：19番教室
配付物一覧：1. 専攻別学生名簿 2. 履修登録手続きについて 3. 履修届記入上の注意	
4. 履修届 5. 授業時間割 6. 学生便覧 7. シラバス	
8. ネットワーク利用の心得 9. 交通安全のために 10. 学生の皆さんへ	
11. キャンパスブック 12. 入学前の既修単位の認定について	
13. 日本育英会大学院奨学生の募集について	
14. 駐車場許可証の申請について	15. 学生証・パスワード通知書

出典：平成14年度新入生オリエンテーションより

**観点B：学習を進める上での相談・助言体制****（取組状況）**

学生は全て特定の指導教員の下で研究に従事し、通常の講義や演習の他にチュートリアルと呼ばれる個人授業を通して適宜指示を受ける場合もある。研究テーマの決定と修士論文の執筆計画は、指導教員との間でとりわけ入念な話し合いを経て行われ、必要に応じて同じあるいは関連する分野の教員が同席し、その後の指導に参画することもある。

教員は学生の個人的な相談に応じるためにそれぞれオフィスアワーを定めており、その時間内であれば面会を求める学生は随時研究室を訪れアドバイスを受けることができる。オフィスアワー以外でも要望があれば対応するべく、研究室の電話番号、E-mail連絡先は『学生便覧』に記載されており、学生は様々な方法で指導教員と連絡を取ることができるようになっている（資料5-2）。

学生を指導する上で、補助的ではあるが極めて重要な役割を担っているのが博士課程在籍のTAである。予算の関係で全ての教員あるいは講座で雇用しているわけではないが、TAは同じ分野・領域で研究する先輩として、指導教員とは異なる形で若い学生への相談相手を勤めている（資料5-3）。

いくつかの講座では本学に事務局などを置く学会・研究会を組織しており（資料3-13（頁 29））、学生に研究発表及び学会活動を体験させる貴重な機会を提供している。在籍中は必要単位の取得と修士論文の作成が中心となるため研究発表の回数は多くはないが、それでも所属講座が運営する学会で口頭発表を行ったり論文をその機関誌に投稿する学生が見受けられ、その数は近年著しい増加傾向にある（資料5-4）。学会運営に参加することで学生は本学以外の教育関係者や研究者と接触することができ、自己の研究テーマについてより客観的・専門的な助言を得る場合もある。

**（分析結果）**

教育目標（4）-2に対応するこれらの取組は相応である。

**（根拠理由）**

学生は、指導教員の助言を基に入学後間もなく適正な課題・内容を持つ研究テーマを選んでいる。他大学から来た者や学部とは異なる研究テーマを選んだ者は、修了までに2年以上を必要とすることもあがるが、これも指導教員との話し合いを通して研究の進捗状況を把握した上で慎重に決定されている。

資料5-2 教員オフィスアワー一覧

オフィスアワーについて

オフィスアワーとは、前席・後席の授業期間中、毎週特定の曜日・時間に、勉学に関する質問や学生生活に関する種々問題について、各教員が研究室などで学生の相談に個別に対応するものです。この制度は、多人数を対象とする通常の講義や演習を補充することを目的としています。ぜひとも、積極的に活用してください。なお、各教員のオフィスアワーの曜日・時間帯は次のとおりです。

注意 E-mailアドレスの表示について、「@」以下が共通の場合は表示を省略しています。この場合斜に続けてoc.okayama-u.ac.jpを入力してください。

学科	教 官 名	曜 日	時 間	場 所	E-mail	備 考	
人間	成田 常雄	月曜日	15:00～17:00	教員研究室	narita@		
	稲村 秀一	水曜日	14:00～17:00	教員研究室	inamura@	第3週は除く	
	高橋 文博	火曜日	15:00～16:40	教員研究室	tfumi@	事前に連絡してください。	
	山口 信夫	月曜日	12:00～14:00	教員研究室	nobuo@		
	北岡 武司	木曜日	12:40～14:20	教員研究室			
	出村 和彦	水曜日	10:30～12:20	教員研究室	demura@		
	竹島 あゆみ	金曜日(前期)	15:50～17:30	教員研究室	ayu@		
		火曜日(後期)	14:20～16:00				
	吉谷 啓次	月(前期) 木(後期)	13:30～17:00	教員研究室	keiji@		
	山口 和子	月曜日	13:20～15:00	教員研究室			
	三宅 新三	金曜日	16:00～17:40	教員研究室		事前に連絡してください。	
	伊藤 大輔	木曜日	16:00～18:00	教員研究室			
	龍野 有子	金曜日	14:10～16:00	教員研究室	tatsuno@		
	金野 猛	木曜日	14:15～15:55	教員研究室	neoco@		
	宇田川 重	火曜日	13:30～15:10	教員研究室	udagawa@		
鎌木 道剛	月曜日	16:00～18:00	教員研究室	mich_s@	できるだけ事前の連絡を。		
行動	多屋 頼典	月曜日	10:30～12:30	心療科-1室	taya@		
	長谷川 芳典	金曜日	8:40～10:20	教員研究室	hasegawa@		
	田中 共子	水曜日	12:30～14:10	教員研究室	toma@	後期は11:50～	
	村本 由紀子	木曜日	12:30～14:10	教員研究室	yukikom@		
	小林 孝行	火曜日	12:30～14:10	教員研究室	kobayast@		
	北村 光二	水曜日	11:00～12:40	教員研究室	kojiki@		
	大杉 津	月曜日	14:00～15:40	教員研究室	ohsato@		
	中谷 文美	金曜日	12:00～14:20	教員研究室	nakatani@		
	藤井 和彦						
	内田 和子	水曜日	10:20～12:00	教員研究室	kuchida@		
	中藤 康徳	木曜日	12:20～14:00	教員研究室	nakatou@		
	中尾 知代	水曜日	12:00～13:40	教員研究室	tnaka@	面接の時間帯は制約に応じて設定可能。	
	北川 博史	木曜日	12:40～14:20	教員研究室	hikita@		
歴史	永田 諒一	木曜日	17:40～19:20	教員研究室	ngt@		
	未定						
	田原 文雄	月曜日	12:50～14:30	教員研究室	tsukuma@		
	加治 敏之	金曜日	13:30～15:10	教員研究室			
	渡邊 佳成	木曜日	14:20～16:00	東洋史演習室	ywata@		
	佐川 英治	火曜日	10:10～12:00	教員研究室	sagawa-e@	FAX 086-251-7410	
	吉田 聡	月曜日	15:50～17:30	教員研究室			
	倉越 克直	月曜日	15:00～17:00	教員研究室			
	久野 修徳	月曜日	14:20～16:00	教員研究室	hisano@		
	姜 克夷	火・木・金曜日	16:00～18:00	教員研究室	jiang@		
	今津 勝紀	金曜日		15:50～17:30	教員研究室	kimazu@	
	稲田 孝司	金曜日		8:30～10:10	教員研究室		
	新納 泉	金曜日		9:30～11:10	教員研究室	inino@	
	松本 武彦	月曜日		10:00～12:00	教員研究室	tmatsug@	
松本 直子	木曜日		10:20～12:00	教員研究室	naoko_m@		

## オフィスアワーについて

オフィスアワーとは、前期・後期の授業期間中、毎週特定の曜日・時間に、勉学に関する質問や学生生活に関する種々問題について、各教員が研究室などで学生の相談に個別的に応じるものです。この制度は、多人数を対象とする通常の講義や演習を補完することを目的としています。ぜひとも、積極的に活用してください。なお、各教員のオフィスアワーの曜日・時間等は次のとおりです。

注釈 E-mailアドレスの表示について、「@」以下が共通の場合は表示を省略しています。この場合斜二線にてoc.okayama-u.ac.jpを入力してください。

学科	教 官 名	曜 日	時 間	場 所	E-mail	備 考
言語	尾川 浩	月曜日	16:00～17:40	数算研究室	ogawa@	
	辻 星児	月曜日	14:20～16:00	数算研究室	s-tsuji@	
	栗林 裕	木曜日	17:30以降	数算研究室	kuri@	
	富崎 和人	月曜日	14:30～16:30	数算研究室		
	片桐 真澄	火曜日	14:30～16:10	数算研究室	kata@	
	中東 靖恵	月曜日	14:30～16:10	数算研究室	yasue@	
	未定					
	渡邊 謙	木曜日	10:20～11:50	数算研究室		
	江口 泰生	金曜日	14:20～16:00	数算研究室	egu@	在室の時もOK。
	田中 洋己	金曜日	14:20-16:00 19:10-19:40	数算研究室		19:10-19:40は前期のみ指定
	片山 倫太郎	月曜日	11:00～12:40	数算研究室	rk@	
	山本 秀樹	月曜日	16:00～17:40	数算研究室		左記の社、随時。251-7428
	堤 良一	火曜日	9:30～11:10	数算研究室	tsuniko@	メールにて予約を。
	岡本 不二男	木 11:30～12:30	金 12:00～12:40	数算研究室		できれば事前に連絡を
	水本 鉄矢	月曜日	15:50～17:30	数算研究室	tetsu@	
	橋 英純	木曜日・金曜日	10:30～12:30	数算研究室	tachiban@	
	遊佐 敬	月曜日	15:50～17:30	数算研究室		
	西前 幸	月曜日・火曜日	15:50～17:40	数算研究室	nishimae@	
	古岡 文夫	月・火・水	9:00～10:20	数算研究室	fyoshi@	
	和田 道夫	金曜日	14:20～16:00	数算研究室		
	中谷 ひとみ	木曜日・金曜日	10:10～11:10	数算研究室		予約（電話も可）必要
	松本 明子	火曜日	16:00～17:40	数算研究室		
	水野 佳三	火曜日	17:30～19:10	数算研究室		前日までに自宅に電話連絡を（要予約） ただし、前期中の5月下旬以降のみ、16:55～17:35
	福持 敏	火曜日	14:10～15:50	数算研究室		
	矢野 正昭	月曜日・火曜日	14:10～16:00	数算研究室	bebun98@	左記以外でも予約すれば可
	高橋 謙和	月・金(後期)	12:30～14:20	数算研究室	german@	
	木之下 忠敬	月曜日	14:00～15:40	数算研究室		
	寺岡 孝憲	月曜日	15:50～17:40	数算研究室	teraka@	
	永瀬 春男	木曜日・金曜日	13:30～14:20	数算研究室	nagase@	
	江代 修	火曜日	16:00～17:40	数算研究室	eshiro@	
	上田 和弘	月曜日	15:50～17:30	数算研究室	uedaki@	
	久保田 聡	金曜日	10:20～12:30	数算研究室	cubecchi@	左記以外にも随時
延味 能都	火曜日	10:00～14:00	数算研究室	emmi@	mailの活用を。	
				<a href="http://homepage2.nifty.com/emmi/index.html">http://homepage2.nifty.com/emmi/index.html</a>	授業情報を載せています。既書可。	
	萩原 直幸	月曜日	14:20～16:00	数算研究室	hagiwara@	
	宮川 栄司	木曜日	12:30～14:30	数算研究室	emyg@	
	金子 真					
外国人教師	レオナード・ジョリアン	木曜日	16:00以降	数算研究室	jeon@	
	ゴートグ、ロードリヒ	水曜日	13:00～15:00	数算研究室	rodegat@	
	未定					
	林 怡	月曜日	14:10～15:50	数算研究室		

出典：『平成15年度学生便覧』より

資料5-3：博士課程学生の文学研究科におけるTA実績

	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度
人間学専攻	0	0	0	0	0
行動科学専攻	1	3	1	1	0
歴史学専攻	1	0	2	4	3
言語文化学専攻	0	0	0	1	0

出典：文学研究科TA集計結果より

資料5-4 学生による学会活動

## 1. 学内設置学会・研究会

	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度
口頭発表	10	9	8	18	19
掲載論文	3	5	5	7	9

出典：アンケート 1

## 2. 学外設置学会・研究会

	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度
口頭発表	7	1	11	22	25
掲載論文	0	0	4	6	6

出典：アンケート 1

**要素1の貢献の程度**

以上の観点ごとの自己評価結果から判断して、学習に対する支援体制の整備・活用に関する取組状況は、教育目的及び目標の達成に相応に貢献している。

**(要素2) 自主的学習環境(施設・設備)の整備・活用に関する取組状況****観点ごとの評価結果****観点A：学生が自主的に学習できるような環境の整備・活用**

(取組状況)

それぞれの講座には学生用の研究室が設けられており、この他に実験系の講座は実験室や実習室を保有している。ほとんどの場合、学生用研究室には基本図書・複写機・パソコン・冷暖房機等が設置されており、その学習環境にはスペースの考慮を含めてある程度の快適さが確保されていると言える(資料5-5)。

語学演習室にはL.L.機材の他にビデオやパソコンが設置されており、各種の自習用教材・ソフトウェアも備えられている。教材は毎年予算措置を受け、追加購入されている(資料5-6)。

平成14年に完成した文化科学系総合研究棟は文学部棟に隣接して建設されており、本研究科所属の学生にも大きな便宜をもたらすこととなった。共同端末室にはパソコン60台、プリンター6台が設置されており、学生の情報収集環境の改善に大きな貢献を果たしている。また、セミナー・ルーム、会議

室，ラウンジ等が数多く設けられていることにより，利用できる空間もそれ以前とは桁違いに増大している。

（分析結果）

教育目標(3)-5及び(4)-3 に対応するこれらの取組は優れている。

（根拠理由）

学生の学習環境に直接的に関わってくるスペースや高速情報ネットワークの整備状況に関しては相当な規模での整備が成されてきている。前者については，上述のごとく文化科学系総合研究棟の完成で大きな改善が計られ，後者については過去数年間にわたる組織をあげての努力の結果，全ての学生研究室にインターネット回線が敷設されることになった。また，平成15年度よりウェブによる履修登録を開始した。研究科全体としても現在計画中であるシラバスのウェブ化は，一部の専攻（行動科学）では既に実施しており，学生による登録手続きや授業に関する情報の入手を迅速かつ容易にしている。

資料5-5 学生研究室備品設置状況

	研究室 の有無	パソコン の有無	エアコン の有無	机(個数)
【人間学専攻】 哲学・倫理学 芸術学 比較文化学				12 (哲倫と共有) (哲倫と共有)
【行動科学専攻】 心理学 社会学・文化人類学 地理情報学			×(実験室に設置)	12 学生数 5
【歴史学専攻】 歴史文化論 日本史学 考古学				2人に1 1.5人に1 6
【言語文化学専攻】 言語学 日本言語文化論 アジア言語文化論 英語圏言語文化論 ヨーロッパ言語文化論				6 10 5(学部生と共有) 5 学生数

出典：アンケート 2

資料5-6 語学演習室備品(主なもののみ)

1. L.L.システム(ブース36台)
2. 映像関係
1)ビデオデッキ(9台)    2) レーザーディスクプレーヤー    3) VHDプレーヤー
4)モニターTV(6台)    5) ハイビジョンテレビ    6) デジタルビデオカメラ
7)ビデオプリンター    8) 書画カメラ    9) 大型プロジェクター
10) スライド映写機
3. 音声関係
1) オーディオカセットデッキ    2) MDデッキ    3) DATデッキ
4) Wカセットデッキ    5) CDプレーヤー    6) アンプ(3台), チューナー
7) カセットデュプリケーター
4. コンピューター関係
1) マッキントッシュコンピューター    2) プリンター    3) デジタルスチールカメラ
5. 分配機関係
1) ビデオセレクター    2) パワーディストリビューター    3) スプリッター

出典：教務学生係資料より

## 要素2の貢献の程度

以上の観点ごとの自己評価結果から判断して、自主的学習環境（施設・設備）の整備・活用に関する取組状況は、教育目的及び目標の達成に十分に貢献している。

### **(2) 評価項目の水準**

以上の自己評価結果を総合的に判断して、学習に対する支援は、教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。

### **(3) 特に優れた点及び改善点等**

平成11年度に行われた改組によりそれまで以上に少人数教育の強化と教育分野の多様化が図られ、個別的な指導・助言の体制が整備されているのは優れている。

本研究科を収容する建物は築40年を超えているため施設自体の老朽化は避け難く、大規模改修計画が実現されない限り安全性や利便性といった根本問題の解決を計ることは不可能である。殊に、阪神淡路大震災以降本研究科の施設の耐震性に関しての危惧が表明されており、多くの命を預かる教育機関としてはその使命と責務の大きさを自覚して速やかな対策を講じる必要がある。

## 6 教育の質の向上及び改善のためのシステム

### (1) 要素ごとの評価

#### (要素1) 組織としての教育活動及び個々の教員の教育活動を評価する体制

##### 観点ごとの評価結果

##### 観点A：組織として教育の実施状況や問題点を的確に把握し、教育活動を評価する体制

###### (取組状況)

本研究科における教育活動の具体的な状況は、FD専門委員会が文学部と一体的に把握しており、それを自己評価委員会が評価する体制となっている。

総括的な自己点検・評価は平成11年に実施し、報告書を公表した。それに基づく改善は、日常的・個別的には専攻・講座単位で、全般的な問題については、各専攻1～2名の委員からなる大学院専門委員会で改善案を策定し、文学研究科委員会の議を経て実施する体制になっている。

研究科委員会は、大学院教育を担当する全ての教員を構成員として月1回定期的に開催され、大学院教育に固有の問題を審議している。

本研究科に関する諸規定・申し合わせ等については『岡山大学文学部規程集』のうちに大学院関係の項目にまとめられており、全教員に配布されている。

###### (分析結果)

教育目標(3)-6に対応したこれらの取組は優れている。

###### (根拠理由)

状況を把握したり、評価したりする体制が整備されており、総括的な自己点検・評価も実施されている。

##### 観点B：外部者による教育活動の評価

###### (取組状況)

平成11年度の自己点検・評価に基づき、同年、5名の外部委員を委嘱して、外部評価を実施した。これは文学部とあわせて実施したもので、委嘱した外部委員は、以下の諸氏である。

(役職は平成11年当時、敬称略)

人間学専攻	眞方忠道	神戸大学文学部教授
行動科学専攻	吉田民人	中央大学文学部教授
歴史文化学専攻	森正夫	愛知県立大学学長
言語文化学専攻	中野三敏	福岡大学教授
言語文化学専攻	戸田吉信	東亜大学大学院教授

評価は、あらかじめ『自己点検・評価報告書』等の文書による事前調査を経た上で、教員及び学生へのヒアリングも含めた現地調査がなされた。各専攻の教育内容、人事組織などについて詳細な調査と評価を受けた。この外部評価をうけて、『岡山大学文学部 外部評価報告書』(以下、『外部評価報告書』という)を作成、公開した。

(分析結果)

教育目標(3)-6に対応したこれらの取組は優れている。

(根拠理由)

自己評価を踏まえて外部評価を実施し、平成12年に外部評価報告書を発行している。

観点C：個々の教員の教育活動を評価する体制

(取組状況)

平成14年から試行により実施（本格実施は平成16年度から）されている教員の個人評価において、個々の教員が行っている本研究科関係の教育活動についても評価を実施した。

個人評価データの集約及び点検・整理は学部の自己評価委員会が中心になって行い、それに研究科長が評点と意見を付して、各教員に返却した。各教員にとっては教育活動を自己点検する重要な契機となり、学部・研究科としても教育活動の全体像を把握する良い機会となった（資料6-1）。

学生による授業評価は、本研究科については実施されていない。これは、大学院の授業が極端に少人数であり、評価の匿名性や客観性を確保しがたいという事情があるためである。

(分析結果)

教育目標の(3)-6に対応したこれらの取組は相応である。

(根拠理由)

教員の個人評価を試行として実施した。定期的な学生による授業評価が今後の課題となっている。

## 資料6-1 平成14年度文学部の教員の個人評価に関する報告書 - 抜粋 -

## 平成14年度文学部実施の教員の個人評価に関する報告書

文学部自己評価委員会

平成15年3月1日

平成14年6月から7月にかけて、全学の「岡山大学における教員の自己評価」の実施（試行）にともない、文学部でも教員の自己評価が行われた。各自が端末から直接ウェブに記入するという方式で、教育・研究・社会貢献・管理運営の4分野にまたがる総合的な評価として実施された。教員各位の協力を得て、委員会としてすべての作業を終えることができた。文学部自己評価委員会としては、ここに今回の個人評価を総括することで、一応の責務を果たしておきたい。報告書の構成は「統計篇」と「問題点と課題」に分けた。平成16年度から本格的な個人評価の実施が予定されているが、後述の「問題点と課題」でも指摘したように、いたずらに評価のための評価に墮すことなく、真に内実をともなった自己点検や自己評価につながるよう今後の改善を期待したい。

## I 統計篇

## (1) 提出について

提出者	76名 (93%)
未提出者	6名 (7%)
総数	82名

※平成14年7月当時  
海外研修中の1名を除く。

## (2) 評価対象の四分野について

## ①教育

評点	
50点	41名 (58%)
40点	29名 (41%)
30点	1名 (1%)
20点	0名
10点	0名
総数	71名

※教育分野未提出者2名と海外研修帰国者3名を除く。

(4) 総合評価（評点）

総合評価	
40～50	37名 (53%)
30～39	27名 (39%)
20～29	6名 (9%)
10～19	0名
0～9	0名
総数	70名

※一部未提出者と海外研修帰国者の計6名を除く。

(5) 総合評価（評語）

総合評価	
A	42名 (55%)
B	27名 (36%)
C	6名 (8%)
D	1名 (1%)
E	0名
総数	76名

## 要素1の貢献の程度

以上の観点ごとの自己評価結果から、組織としての教育活動及び個々の教員の教育活動を評価する体制は、向上及び改善のためのシステムがおおむね機能している。

## (要素2) 評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステムの整備及び機能状況

### 観点ごとの評価結果

#### 観点A：評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステム

(取組状況)

評価結果はFD専門委員会、自己評価委員会で検討され、それを踏まえて大学院専門委員会が改善案を策定し、研究科委員会の議を経て実施する体制となっている。学部と大学院を一体とした改革については、文学部総務委員会及び将来構想検討ワーキンググループにおいて検討しており、それぞれに大学院専門委員会から代表が参加し、連携をとって取り組んでいる。文化科学研究科との連携についても、文化科学研究科将来構想検討委員会に大学院専門委員会から代表が参加し、常時議論している。

(分析結果)

教育目的(3)-6に対応したこれらの取組は優れている。

(根拠理由)

制度や選抜方法の改善、評価活動の実施、持続的な改革議論などにつき、大学院専門委員会を中心に具体化するシステムが機能している。文学部及び文化科学研究科との連携も取られている。

#### 観点B：評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付ける方策

(取組状況)

外部評価では、人事の公募制が堅持されていることが評価された。人事構成の多様性も確保されており、本研究科担当教員に占める女性の比率は高い(資料6-2)。自己点検・評価を踏まえ、学生募集の年2回実施、社会人特別選抜やヨーロッパ言語文化論講座での選抜方法の改善、昼夜開講制の推進、長期在学コースの設置など、継続的な取組を積み重ねてきた。

現在、より総合的・学際的な教育を行うとともに、大学院教育に対する多様なニーズに応える文化科学研究科との連関性を高めるために、法学研究科・経済学研究科と連携し、文化科学研究科との一体的な改組を検討中である。この案については、将来構想検討ワーキンググループ及び大学院専門委員会においてとりまとめ、文学部の改組案とともに議論している。

教員の個人評価のうち、教育活動の面をどのようなかたちで大学院教育の改善に役立てるかについても、大学院専門委員会及びFD専門委員会において現在検討中である。

(分析結果)

教育目標(3)-6に対応したこれらの取組は優れている。

(根拠理由)

本研究科の取組は外部評価でも評価されており、その後も継続的に改善の取組を行っている。今後の改組についても具体案が作成されている。

資料6-2 文学研究科担当教員のうち女性の比率

(平成15年5月1日現在)

専攻	教員数( A )	うち女性教員数( B )	女性教員の比率( B / A )
人間学専攻	14	3	21.4%
行動科学専攻	13	6	46.2%
歴史文化学専攻	15	2	13.3%
言語文化学専攻	33	5	15.2%
計	75	16	21.3%

出典：文学研究科教員・現員表より

**要素2の機能の程度**

以上の観点ごとの自己評価結果から、評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステムの整備及び機能状況は、向上及び改善のためのシステムが十分に機能している。

**(2) 評価項目の水準**

以上の自己評価結果を総合的に判断して、教育の質の向上及び改善のためのシステムはおおむね機能している。

**(3) 特に優れた点及び改善点等**

自己点検・評価及び外部評価を実施し、それに基づく改善を行っている点は優れている。文学部及び文化科学研究科との一体的な改組が企画されている点も優れている。また、教員の個人評価も特色のある取組で、今後の改善への活用が期待される。反面、大学院教育について学生による授業評価が実施されていない点は、早急に改善が必要である。この点は、岡山大学全体の動向を考えながら連携しつつ早急に改善する。

## 特記事項

- 1 平成13年度から一部の専攻で開始した社会人などを対象とした長期在学コースを、今後、他の専攻にも設けることを検討している。
- 2 TA制度は平成10年度から始まり、従事する学生数も次第に増加している。今後も従事する学生数を増やすとともに、活動内容の改善を図って、より充実した制度とする。
- 3 大学院教育についてもFD活動を強化し、学生による授業評価を実施する方向で大学全体との調整をすすめる。
- 4 修了者の多様な進路を確保するために、学部学生に対して行っているインターンシップを大学院学生に拡大することを検討する。
- 5 平成14年度に試行された教員の個人評価は平成16年度より3年に一度の割合で実施される予定である。その方法をより効率的なものとするための改善を行うとともに、その結果を大学院教育の改善に結び付ける方を工夫する。
- 6 現在、文化科学研究科の区分制大学院への改組が平成16年度に向けて準備されている。その際には、本研究科は法学研究科・経済学研究科とともにその博士前期課程として再編成される予定である。

新しい前期課程の教育組織は、人文社会科学を融合した3専攻からなり、学際的・総合的な教育を目指したものとなる。併せて、次の諸点を重視した改善を図る。

- 1) 学部教育との連携を図りつつ、大学院独自の専門教育を実施するための体制の整備。
- 2) 社会人の再教育・生涯教育・留学生教育など、社会の多様なニーズに応える内容と体制の確立。
- 3) 高度専門職業人及び研究者の養成を目指す博士後期課程との有機的な連携の強化。
- 4) 現代社会が直面する課題に対応した先端的研究と基本的な専門教育との統合。